

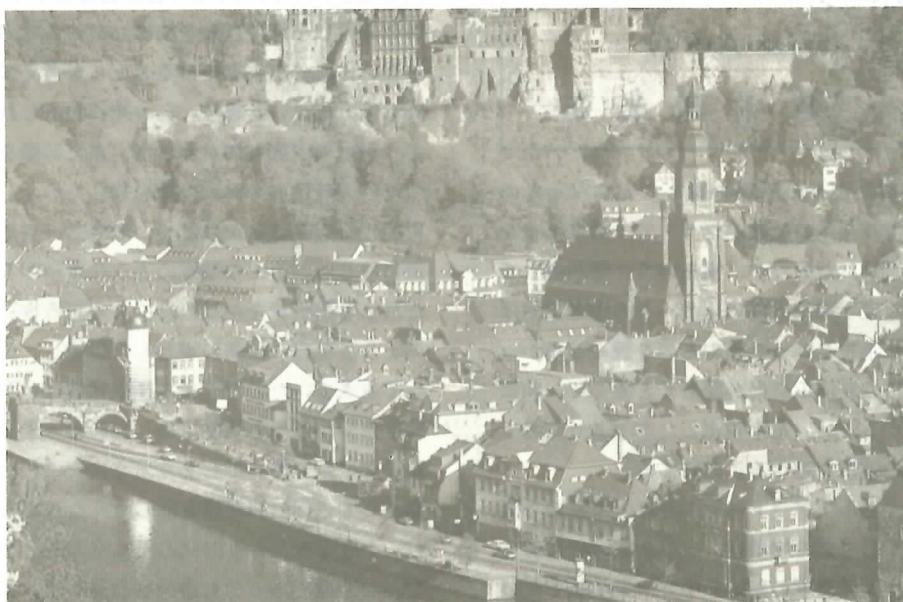
# 図書だより

〈第17号〉

昭和62年10月15日

呉工業高等専門学校

図書委員会



▲ネッカー川に面した大学都市ハイデルベルグ

## 目 次

〔読書感想文〕			
「プラトーン」(デイル・A・ダイ) .....	5 E	前原 光正	2
「もう一つの広島」(御田 重宝) .....	5 C	増木 誠治	3
「ドイツと日本」(崎村 茂久) .....	5 A	田口 直子	4
「若者たちよ自立をめざせ」(スチュアート・ピッケン) .....	4 C	塩田 純次	5
「青玉獅子香炉」(陳 舜臣) .....	3 M	楠 正広	6
「論語物語」(下村 湖人) .....	3 A	岡村 謙一	7
〔私の読んだ本〕			
「対話による大学数学.3」(末松 豊彦) .....	4 E	神田 孝浩	8
「大工道具の歴史」(松村 貞次郎) .....	2 M	楯崎 裕昭	8
「塩狩峠」(三浦 綾子) .....	2 E	上田 一成	9
「どくとるマンボウ航海記」(北 杜夫) .....	2 C	森脇 正博	9
「茶の世界史」(角山 栄) .....	2 A	大原 晋二	10
〔随 想〕			
本を読むことについて .....	5 M	茶谷 昌樹	11
建築における読書の意味 .....	建築学科教官	篠部 裕	12
〔海外だより〕			
ガンネの「ドイツ通信」 .....	一般科目教官	岩根 三邦	13
〔窯場めぐり〕			
山陰の窯場を訪ねて(-) .....	一般科目教官	柘本 紘二	16
〔郷土の歴史〕			
厳島合戦前後の呉 .....	一般科目教官	宇根 俊範	18
〔図書館を訪ねて〕			
近畿大学工学部図書館 .....	図書係長	土佐 智義	19
お知らせ .....			20
新着図書案内 .....			21
編集後記 .....			31

## 読書感想文

## 「プラトーン」

(デイル・A・ダイ)

5E 前原光正

僕がこの図書だよりの原稿を書くことになったのは、5年間に借りた本の総数がクラスで一番多かったということで選ばれたのだが、実をいうと僕が借りていたのは、もっぱら電気実験のレポートの参考文献ばかりで、あまり小説といった類のものを読んでなかった。そこで、この夏休みに何か読もうと考えて、前に見た映画「プラトーン」を小説化した本があったのでそれを読んでの感想を述べることにする。

この本のタイトル「プラトーン」とは、軍隊の小隊を意味する。そしてこの物語は、ベトナム戦争において米軍のベトナム派遣軍の部隊の中で、最前線で戦いつづけた小隊の若者たちの心の葛藤を描いた作品であった。

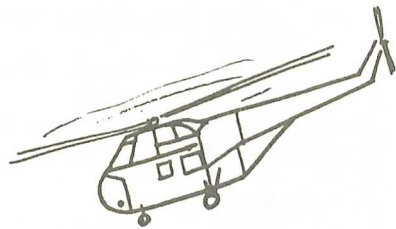
映画を見た時に、心に一番強く残ったのは、悲しみだった。いろんな残酷な場面があったが、どれも気持ち悪いとか恐ろしいとかいった気持ちよりも、悲しいと思う気持ちの方が強かった。

僕は、ベトナム戦争について多くを知らない。比較的最近の戦争であるが、太平洋戦争などに比べると、その背景などが全然はつきりしない。ベトナム戦争に英雄になるために戦いに行った若者たち。その平均年齢は19歳だというが、彼らは英雄にはなれなかった。圧倒的な軍事力と物資を誇るアメリカが勝てないまま戦争が終り、帰国した彼らを待っていたのは、味方であるはずの自国の人々の冷たい目と罵声だった。自国のために死ぬ思いで戦ってきた彼らが戦争の加害者としてその責任を押し付けられることになったのだ。僕はこの「プラトーン」を読んで彼らが加害者ではなくて被害者として扱われるべきではないかと思った。戦争というものがこれほどまでに恐ろしく、残酷なものであることが正直言って今まで分っているようであつていなかった。この「プラトーン」の中では、敵はベ

トナム兵ばかりではない。ジャングルという厳しい自然環境と味方の兵、そして自分自身の中にも敵がいた。いつも同じ小隊で行動を共にしている味方であってもお互いに自分が生きのびることしか考えていない。それも仕方がないと思う。いつ死ぬかもしれない最前線で、作戦の内容も知らされず、常に緊張を強いられ、ただ目の前にあらわれた敵を殺していく。生きのびる可能性の方がはるかに低く、無傷でいられることは皆無に等しい。そんな地獄のような余裕のない日々ではだれしも我が身をかばいたくなるだろう。僕らの毎日のくらしを彼らは夢の事として想像し、それを希望にして生きていたのだ。また極限状態におちいると、人間は自分がこうも残酷であったのかと思えるような行為でも平気でやってしまうようになる。それを当然の事として、何の罪悪感も感じなくなればもうおしまいだ。そうなるともう内側の死んだ人間になってしまう。どんな苦境であっても自分を見失わず、人間性を失わないように生きる。これは何よりも大切で大変な戦いであると思う。

このベトナム戦争を生きのびて帰れた者たちの心には、深い傷が刻まれ、その心はもう二度と安まることはないと思う。テレビで見たが、彼らのうちの何人かは、完全な社会復帰が出来ず、人里離れた山奥で心をふるわせながら、ただ死がおとずれるのを待ちながら暮らしている。

ベトナム戦争に限らず戦争というものもたらす傷跡が、いかに大きいかを改めて実感した。



## 「もう一つの広島」

(御田 重宝)

5C 増木 誠治

広島市に壊滅的大打撃を与え、長きにわたった戦争を終焉に導いた原爆が投下されたのは、昭和20年8月6日だった。

また、中国地方を枕崎台風が直撃し、甚大な被害をもたらしたのは、同年9月17日だった。

本書は、それら二度に及ぶ苦難を受けつつも、他企業の先陣をきって広島市の復興に力を尽くした中国新聞社の姿を、自らのペンによって描いたものである。

最初に、原爆投下直後の広島の様子が、中国新聞社社員各々の行動を追う事により、つまり様々な視点から詳しく記されている。偶々郊外に出ていて難を逃れた人、建物の死角にいたため、危うく救かった人、又、運悪く外にいたので大火傷を負った人等、その日の行動が明暗を分けているが、中国新聞社社員の人達がその後とった行動は、はっきりと一致している。現在、僕達からすると全く考えられない事なのだが、満身創痍の人でさえも「本社は無事か？」と心配し、実際に駆けつけているのである。当時の人の持つ気概からか、それとも新聞記者としての使命感から来るものかはわからないのだが……。

この後、何人かの記者は未曾有の大惨事の取材に勤しんでおり、様々な記録を残している。その中で、特に心に残った部分があったので抜粋しておく。

——御幸橋の中央あたりの、川上の歩道から西詰めに設けられた救護所に焦点を合わせ、ファインダーをのぞき、シャッターを押そうとして、あわててカメラを引っ込めた。「被爆者の目が、全部自分の方に集中している」という自意識が脳の中樞を支配した。そして、「もしシャッターを押したら、怒った被爆者の群れが、自分を襲撃してくるのではないか」という恐怖に見舞われた。……(中略)……が松重カメラマンは恐怖心を「報道班員」の腕章を前面に押し出す行為で克服し、シャッターを押した。

——一度シャッターを押すと、二度目は五、六歩も被写体に近づいて写すことができた。

だが、三度目、バサバサ髪の女性徒の肩から腰にか

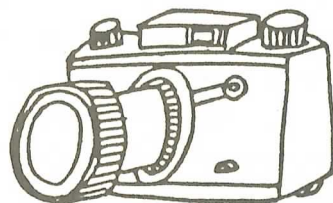
けて赤黒く焼けただれている部分に焦点を合わせた時、急にファインダーが見えなくなった。涙でガラスがくもったのである。「かわいそうに一。」と思ったとたん、いけなくなったという。「これ以上は撮れない。」

いささか、抜粋に行を費しすぎたが、このカメラマンの心理が、痛いほどよくわかる。昨今、徒らに「報道の自由」「知る権利」をふりかざし、ズカズカと人の家を土足で踏みこむような輩が横行しているが、彼らがあのような状況下に置かれた場合、同様の態度をとるかどうかは甚だ疑問である。僕達は「まず、ひとりの人間である」ことを忘れてはならない。

ところで、当時の新聞が「一県一紙」体制を敷いていたことを、僕はこの本で初めて知った。地方紙、全国紙の区別がなく、一つの県で一つの種類の新聞しか読むことはできないのである。日本もドイツに倣って報道の重要性を認識し、統制下に置いたという事と、戦中の資材不足という背景があったのだが、これがまた別の面でプラスに作用することになる。つまり、中国新聞社が原爆によって印刷不能となった時、他紙が代行印刷を行っていたのである。勿論、新聞社相互の協約によるものだが、「一県一紙」体制抜きでは困難だったのではないだろうか。枕崎台風の時も然りで、温品の工場が雨で印刷不能になった時も、代行印刷を依頼している。

中国新聞社の復興が手早くなされたのは、そういった他紙の協力、社員が一丸となって努力した事等が結実したからに他ならない。

この本は、単なる原爆に関する記録でもなければ、或る企業の復興の歴史でもない、今になって思う。人はこういった非常時には何をすべきか、又、如何にして職務を全うすべきか、そういう事を教えられたように思うのである。



## 「ドイツと日本」

(崎村 茂久)

5A 田口直子

この読書感想文を書く上でこの本を選択したのは、はっきり言って、私の専攻する一般選択科目の『ドイツ語・ドイツ文化論』の授業でこの本を使っているからである。どちらかという活字嫌いな私は、あまり好んで読書するタイプではなく、よほど気に入った本か、活字が大きくて厚みが薄く、挿絵・写真の多い本か、或いは必要に迫られて読まざるを得ない本しか読まない性である。正直に書くと『ドイツと日本』はこのタイプの最後の部類の本であったが、初めのうち次の授業の為に機械的に読んでいた私は、授業時のこの本についてのディスカッションで人の意見を聞き、自分の意見を考え、述べる様になって、少しずつ興味を覚えつつ読み進めている。読み進めるといっても授業ではもちろん、ページを追ってディスカッションを進めているが、私は最後の方を読んでみたり、まん中の部分を読んだりしている。というのは、この本は一つのあらすじがページを追って描かれているのではなく、何章かの独立したエピソードの寄せ集めの構成となっているので、ちょっと開いて面白そうな所をどこからでも読めるのである。こういう構成が、読書が苦手な私にとっては、読み易いのだと思う。

この本は、ドイツで数年間過ごした著者のいわば“ドキュメンタル・レポート”である。ドイツの風俗・習慣・衣食住、そして彼をとりまく人々を、自分の目を通して描かれている。また、著者が一つ一つのエピソードについて、自分の意見がある時は甘口に、ある時は辛口に論じているのも興味深い。また、この本には“ドイツ”に偏らず、日本とドイツを比較したり、ドイツをとりまく国々についても描かれている。

例えば、自動車について、見栄を張って高い車を買ったり、手入れを一生懸命したり、ちょっと車が傷つけば大騒ぎするのは、日本人やドイツ人だが、車体が凹もうが車は動きさえすりゃいい、というのはフランス人、というくぐり意外で面白かった。この様に単に、ドイツやドイツ人のみではなく、ヨーロッパの人々の国民性をもあわせてユニークに綴られている。

ただ、私にとって感心できないのは、一つ一つのエピソードについて、著者が自分の意見を述べているのは面白いが、その意見にいささか偏っているのではないかと、という部分があることだ。もっとも、ある出来事についてその人の抱く疑問や意見は多種多様であろうが、しかし、このような事について、自分なりに「これはこうでなく、こうだ。」と色々考えてみるのも必要な事ではないか、と思ったりする。

ところで、もし私が将来海外旅行に行くことができるのなら、一番行ってみたい国は、実は西ドイツである。もちろん、観光目的だが。最近、特に、日本人が海外へ滞在する機会が多い。ところが、これらの人々は、長期滞在の経験を持つ人を除いてその外国の国々の文化・風俗習慣を知り、その国々を理解している人は少ないと思う。異国の地に足を踏み入れたことのない私はなおさらそうである。だから、自分の興味ある国の姿を知りたいければ、書籍やTVの紀行番組に頼らざるを得ない。その中でも、“ガイド”的な性格のものよりも、自らの体験をもとにしたものの方が、得るところが大きいと思う。これらにより、自分がその国に抱いていた誤った先入観をとり除き、違った方向からその国をみつめられたなら、TVでみるその国の風景も、今までとまったく違って映るのではないかと。

海の彼方のある先進国の田舎では、今もなお、日本人はチョンマゲを結って、キモノを着て、主食はサシミで、ハラキリをやっていると思っている人がいるそうである。こんな極端でないにしろ、私たちはいろいろな国に、多少な誤解をしている面があるのかもしれない。この様な誤解を解く為にも、この『ドイツと日本』に限らず、いろいろな国に関するレポート本をちょこちょこ開いて読んで見るのも、少しは必要ではないかと、あまり本好きでない私は思ってしまうのである。

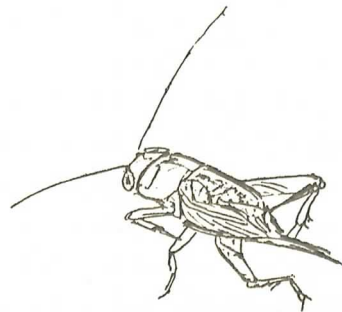


「若者たちよ自立をめざせ」  
(スチュアート・ピッケン)

4C 塩田純次

この本は、普通一般の本と違い物語に属さない。この本は「若者たちよ、自立をめざせ」という題からもわかるように総合的人間学を扱っている。なぜ私が今回この本を読もうと思ったか理由を述べておきたい。先日、日米高校生の各種アンケートの結果をニュースで放送していた。その結果、日本と米国のこれから大人になろうとする同世代の考え方は全く違った解答が得られていた。日本の高校生はこれから社会の一員として生活をする自覚が欠けていたのだ。これらのことから私はこの本を読むことにした。本書で扱っている総合的人間学は四つの段階に分けられている。まず一つは身体的側面、次に、知性的・道徳的側面、社会的側面、精神的側面である。特に知性的・道徳的側面を私は取り上げてみたい。まず我々個人の知性をどう磨くかという問題である。私達の多くは知性を磨くには勉強をすることだ、と考えていると思う。その勉強とは学校での教育のことを示している。しかし、この本では、そのような考え方を一掃し、本当の意味での知性を私達に教えてくれている。本書によると、『学校の教育は、社会で機能するための必要な読み書きといった基本的技術を教え、人生に対する備えを身につけさせるだけであり、本当に生きようとするならば、これよりはるかに多くの教育が必要であり、日々に新たな経験を積み自らの発展を促がすことが、知性を磨くに他ならない』と、言っている。また、現在、最も私達の生活の中で影響力を持っているテレビについて、その危険性を説いている。その一つは、テレビの教育的価値にもかかわらず、現在テレビは私達の意識の中を走り抜け、頭脳を無意識のうちにイメージで溢れさせて思考を受け身にさせ、なおかつ知性的創造力のもととなる自然な好奇心や探求心は、情報を常に受け身の状態で受けとるので、抑圧されてしまい創造力を破壊しているということだ。また次に重要なこととして、テレビが私達を人工的環境に追いこんでいることを警告している。現在の日本は都心に見られるような密閉された、近代的ビルに住むことも多く、常に人工的環境

にいと、皮膚の生来自然に持つ感覚が鈍くなる。これと同じように、テレビも私達がじかに体で感じ取る経験というものを壁に閉じ込め、それによりすべての経験が間接的なものとなっている。これらにより人間の視野が少しづつせばめられていると作者はいつている。私は、作者の言っていることは最もだと思う。なぜなら、現代人はテレビに対して絶対的信頼を寄せられているため、何が起こってもテレビで報道されない限り、信じようとしなない人や、何事であろうと自分の考えよりもテレビの言うことのほうを信じてしまう人が多いことからいえるだろう。特にこのようなタイプの人間は若い世代に多い。年配の方々は戦争等の体験により報道がいつも正しいとは言えないことを身をもって体験されているが私達のような十代の者はそのような経験を持たず、「テレビっ子」という言葉からもわかるように、小さい頃からテレビを見ているため、大部分の報道に疑うということをしていない。これらから知性の促進を妨げられ、また精神的にも悪い要因をつくり出しているのだろう。テレビがすべて悪いわけではないが、自立の妨げになっていることは間違っていない。そういう私自身もひまさえあればテレビを見ているため反省をしなければならないことがとても多くある。現在、若者と呼称される10代後半から20代前半の人々は無気力な人間となり、それらから「三無主義」という名称までつくられている。私達はもっと各自が自分のなすべきことを自覚し、そして自立をしなければならぬ年代に差しかかっている大切な時期である。そういう時期であるから、本書は私達にとってとても貴重な存在であると思う。私達一人一人が自立をめざす時期にさしかかっている現在、本書を一読することが必要であると思う。



(by 4E 石本久人)

## 「青玉獅子香炉」

(陳舜臣)

3M 楠 正 広

この作品を読み終わってまず思ったのは、結局、李同源にとって青玉獅子香炉とは何だったのか、ということだった。師匠である王福生から引き継いで香炉を彫り、その後は戦火を逃れて香炉とともに各地を転々とし、最後はアメリカまでも行き、まさに半生を香炉とともに過ごした李同源だが、僕は、李同源は香炉とともに半生を過ごすことによって、逆に、半生を無駄にしたのではないかと思った。香炉を最後に、せっかくな腕をもちながら二度と玉を彫らなくなったからだ。香炉に全力を注いだので、緊張が途切れたのかもしれないが、李同源は、香炉以上の作品をつくる自信がなくなったのだろう。単に、素英への愛とか香炉への愛着とかいうのではなく、完全に自分と一体化した香炉への執念といったものが伝わってくる。それだから、台湾で香炉が模造品とすりかわっているのを目の前にしたときの李同源のショックは、目の前で自分が殺されるのを見たのと同様かそれ以上だったろうと思う。17年間もはなればなれになっていたからだ。それから5、6年後に素英と一緒に自分がつくった香炉をアメリカまで見に行ったとき、結局、李同源は香炉を見なかった。そのとき、李同源の頭の中は、23年ぶりに見ようとする香炉への期待以上に恐怖でいっぱいだったろうと思う。その恐怖とは、香炉を見てしまった後で必ず自分を襲うであろう虚脱感の予感ではなからうか。長い間見ることのなかった香炉と対面した瞬間、興奮でしばらくは我を忘れて香炉との再会に身をゆだねるだろうが、その後は、「香炉との再会」という23年来の目標を果たした彼を虚脱感が襲うだろう。香炉と再会することだけを心の支えに生きてきた感のある彼が目標を果たし、心の支えを失ったら、彼はもう生きてゆけないのではないだろうか。彼は自分でそれが分かっていたのだろう。そして、彼は心の準備ができぬまま、ポスターとしての香炉を見た。突然現れた香炉に、彼は計りしれない衝撃を受けた。そこには、再会の喜びなどみじんもなかったろう。彼はおそらく、香炉に自分の過去を見た思いがしたのではないだろう

か。香炉製作以来、35年にもわたって香炉だけを人生の友としてきた彼は、それがいかに愚かなことか、ということに気付いたのにちがいない。自分の過去に対する後悔で胸がいっぱいになったのだろう。だから、彼は実物としての香炉を見ることを拒んだ。それほど衝撃を受けた彼には、もう一度香炉を見ることは耐えがたい屈辱だったろうからだ。しかし、結果的には、実物の香炉を見なくてよかったのだ。彼は、「ぜんぶ…世の中がぜんぶ、私に近づいてきましたよ。やっとわかりました。…アメリカまできた甲斐がありました。」と言っている。彼は、自分の過去をすっきり清算できたにちがいない。そして、彼はおそらく香炉にかわる、別の人生の目標を見つけたのだろう。もし、あのままポスターを見ずに実物を見たら、彼にとって人生イコール香炉で終わってしまったろう。一つのことによって人生を費やすのも素晴らしいことかもしれないが、彼の場合は香炉にすぎることによって、人生から逃げていたのだ。祖国の革命や抗日運動にも無関心だったことからそれがうかがえる。それではあまりにも寂しい人生だ。香炉を彫ったことが結局はマイナスとなるのだから。彼にとっての人生とは、香炉を彫ったことがプラスとして作用するものでなければならないからだ。その意味で、まさに、アメリカへ行ったことが彼の人生の転機となったのである。

この作品によって僕が教えられたのは、人生の目標に向かってひたすら突き進めということ、しかし、誤った目標は、結局、人生そのものを狂わせてしまうのだ、ということである。



(by 4A 三町康彦)

「論語物語」

(下村 湖人)

3A 岡村 謙一

この読書感想文提出を機に、ぼくは下村湖人の論語物語を読むことにした。最初は、このタイトルを見たとき非常に難解な本ではないかと心配したが、読み始めてすぐにその心配は消えた。この本は、そのタイトルの如く物語調で書かれていて、又、現代口語で書かれている為、読みやすいからだ。

この本一冊読んだだけでは、孔子の教えの真髄は分からないし、論語の全体観もつかめなかったほかだから、自分のためになったり、心に残った一つ一つの物語に関しての感想を書くことにする。

まず「志をいう」では、子路・顔淵の理想が聞けたが、やはりぼくも、子路の理想より顔淵の理想の方が優れていると思った。孔子の理想は、「老人たちの心を安らかにしたい、朋友とは信をもって交わりたい、年少者には親しまれたい。」であったが、ぼくも、子路の考えたように、あまりに平凡に思えて少し意外であった。しかし、よく考えてみると、子路・顔淵・孔子の3人のうち、最も自己中心的な気持ちのないのは、孔子の理想であることに気がついた。又、この話でも孔子の特徴が出ていると思った。その特徴とは、あまり多くを語らないで、自分で考えさすことで、この特徴は他の話の中でもよく出ている。又、孔子はその夜、寝床に入ってから子路の為にいろいろと心を砕いたということから、孔子の弟子に対する愛情の深さと、孔子も結局凡人なのだと感じました。

次に「自らを限る者」のこと。

ここでは孔子のものの長い目での見方を感じた。それは、いまにも斃れかけている冉求に対して、まだそれは道を行う途中の段階であると感じて、冉求の弱気を戒めているように思ったからだ。また、そのことから孔子の厳しさも感じた。

次は、「宰子の昼寝」

この話では、正直いうとぼくは宰子が少々かわいそうに思えた。宰子はその夜、孔子の前で抱いていた気持ちも、もしぼくが宰子と同じ立場ならばとも共感できる。しかし、孔子の言葉から「口先だけで人をいい

くるめる」ことは、「人間同士の信がなくなる」のでよろしくない、という理くつがわかった。

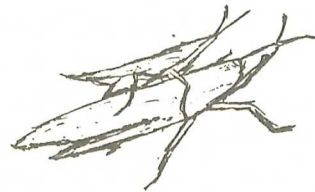
孔子の教えは、現実離れしていると思っていたぼくの気持ちは、この話を読んで、それが消えた。なぜなら、自分の弟子の過ちを機に「過ちはすなわち改むるに憚ることなかれ」や「過ちて改めざる、これを過ちという」などの有名な言葉を残しているからだ。

次は、「泰山に立ちて」

この話では、孔子自身の経歴が語られていた。孔子がこんなに常に正直に生き、常に自己錬磨にはげんでいたのにはおどろいた。そして、孔子が胸に抱いている真理の実相や、境地の奥深さにも、おどろいた。

又、孔子自身の、自己反省の力や、意志の強さも改めて感じた。孔子が、死の七日前、「泰山それ壊れんか、梁木それ摧げんか、哲人それ萎びんか」と涙を流しながら子貢に聞かせてやった。という場面では、なにかしらぼくは感動した。

心に残った話についての感想を一つ一つ書いてきた。おぼろげながらわかってきた孔子の教えについての感想を書く。ぼくは、はっきり言って、孔子の教えは、ある程度以上になると役に立たないと思う。(その程度とは、人間を変えていく程度のこと。)なぜなら、孔子の教えは、つまり孔子の言葉の如く自分を規制していくことを主な修業としているが、これでは、人間が一人一人持っている運命によってその修業を断念せざるを得なくなった場合、孔子の教えはその運命を突破するべき強大な力がないように思えるからだ。要するに孔子の教えはいまいち消極的な感じがするわけだ。



(by 4E 金本守人)

## 私の読んだ本

### 「対話による大学数学.3」

(末松 豊彦)

4E 神田 孝 浩

文学小説等を書く感想文とやらを、専門書について書いてみようと思う。

といっても、教科書を紹介するほど、手を抜くつもりはない。ここでは、わかりやすく書かれた、ガイドっぽい本を取り上げてみたい。

まず、これらの本には次のタイプに分けられるであろう。

1. 絵や図のいっぱいあるもの
2. 説明の丁寧なもの
3. 対話型式で解説するもの
4. その他

かなり大ざっぱだが、今までであると、1のタイプが主であると思われる。確かに絵や図は多いほうが良いけれども、その割に書いてある説明はたいしてわかりやすすくない。しかし、『電気磁気学ノート(コロナ社)』みたいに、かなり面倒な理論をわかりやすく、丁寧に解説してある本だってある。

次に、2のタイプだが、さっきの『電気磁気学ノート』もこれにあたるだろう。ただ一つ、勘違いしてほしくないことは、これらの本の説明は「丁寧」であって「簡単」とはちがうのである。わかりやすい本であっても、小中学生向きではお話になろうはずがない。

3の対話型式であるが、これは意外に多いと感じている。たいていが討論型式を用いているので、将来参考になることもあるだろう。これらには『対話による大学数学』シリーズや、『MaxとMinに泣く』等の『～に泣く』シリーズがある。前者の方が数式の具体的な展開が多く、高専生には向いている。ただ個人的には、後者の味(?)のある対話にも興味をひかれる。

今回は、『対話による大学数学』の『微分方程式』について述べてみたい。

この本では、先生(T)とA、B、Cの3人の生徒

とが、対話型式で微分方程式を解いていく形となっている。

この本は大学生向きに書かれているために、数式の定義に多少うるさいきらいはある。また、高専で学習する範囲をちょっと越えている。それらを除くと、式はととてもいねいに解説してあるので、3年生のみならず、微分方程式を忘れかけている上級生の復習用にはぴったりの本だと思う。

多少文句をつけると、説明が対話式なのに、所々わかりにくい部分があるし、2～3ページつづいて式を展開していると、読んでいてだるくなることもある。

どうも感想文になっていないが、紹介文だと思ってくれた方が良いでしょう。今までこういう本をとりあげて紹介することはなかったように思うが、せっかくみんな良い本を知っているのなら、こういう機会に知らない人に教えてあげるといのもいいんじゃないのだろうかと感じる次第である。これぞと思う本があれば他の人もぜひ教えてもらいたいものだ。

### 「大工道具の歴史」

(村松 貞次郎)

2M 檜 崎 裕 昭

まず、なぜ僕がこの本を読んだかという、図書館に行き歴史の本をさがしていると、この本が目に入ったのです。題には大工道具の歴史と書いてあります。なぜ大工道具に目を引かれたかといえば、僕の家が木を扱う仕事をやっている関係で、大工道具というものを幼い時から見てきているので、この本に興味をもった訳です。

さてこの本ですが、最初に第一章として、「道具再見」という題で書かれています。ここを読んでいると、なるほどと感じるところがたくさんありました。まず、この第一章の中には、大工道具もだんだん機械化されているというのがありました。その簡単な例として、昔は鉛筆をナイフで削っていたのですが、最近では、



鉛筆削りというものがあり、ナイフで削るようなことはなくなりました。しかも子供達が手で廻す鉛筆削りがめずらしいということが書かれていた。これには僕もびっくりした。自慢ではないが、僕は下手ながらナイフで鉛筆を削ることもできるし、もちろん手廻しの鉛筆削りだって知っている。このように考えていくと、大工道具というものは、だんだん少なくなってきて、それにつれて、職人も減ってきているということがいえるだろう。

第二章からは、いろいろな道具一つ一つの事について書かれているわけだけれども、どの大工道具一つをとってみても、それぞれに歴史があり工夫されて、現在の姿になっているのである。しかし、このように考えると現在工夫されたものが機械化されているものとすると、すこし悲しいような気がする。

全体として感じた事は、大工道具が変化していつて、なくなったり、あるいは機械化されたりして、原型が少なくなってきている。全部が亡びてしまうのは、あまりにも悲しいので、少しでも多くの大工道具をこれからひきついでいってほしいと思う。

### 「塩狩峠」

(三浦 綾子)

2E 上田 一成

永野信夫は、明治10年2月に東京の本郷で生れた。信夫は、母が死んだときかされながら、祖母トセが母代りになって育った。彼の母は、キリスト信者である故に、トセに家を出された。トセは大のキリスト教嫌いで、信夫はその影響を多分に受けて育っていった。

信夫が三年生の時であった。父貞行が母菊と今だつき合っているとトセが知った。その夜、トセが死んだ。死後、母は再び父と共に暮すようになったが、信夫はキリスト信者の母にどうしてもなじむことができなかった。信仰を全うしようとした母を許すことが信夫にはできなかったのだ。しかし、信夫は祖母の急死、父も急死という体験から死について考えるようになり、次第に罪ということも考えるようになった。特に少年時代から青年時代に覚えた肉体的な悩みに、信夫は、自分自身が罪深いものに思ったりした。

父の死後、信夫は大学進学をあきらめ、父の上司の世話により、裁判所の事務員になった。勤め始めて、2カ月余りたったときだった。昔の親友の吉川が、突然訪ねてきた。その夜、吉川の住んでいる北海道についていろいろ聞き、信夫は行ってみたくなった。それで、信夫は北海道で暮らすことにした。そこで信夫は、キリスト信者となり、鉄道会社に勤めながら教会へもかよっていた。上司からの縁談があったが、ことわり吉川の妹のふじ子と結婚したいといいだした。最初吉川は、ふじ子は病人なので断ったが、結局、2月28日に結納をすることになった。結納の日信夫は汽車のついでふじ子の所へ行く途中、塩狩峠で汽車が離れた。信夫は止めようとして、犠牲死した。

この作品は、明治42年2月28日に塩狩峠において犠牲の死をとげた長野政雄氏をこの小説の主人公の永野信夫の原型にしたものである。

この作品の読み所は、最後の犠牲死する場面であろう。今日は結納の日といえども、他人の命を救おうとして自分の命を投げ出すというところが感動的である。この犠牲というのはなかなか難しいものである。ヨハネ福音書のイエスの言葉に「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」とあるが、僕もそう思う。友に対する愛というものがなければ、そうかんたんに自分の命を捨てることは出来ないはずである。この小説を読んで、実に永野信夫は、そういう心をもった人間像ではないかと思った。

### 「どくとのマンボウ航海記」

(北 杜夫)

2C 森 脇 正 博

この話は、作者がある時友人に、「船医になったらどうだ？ そうして、向こうに着いたらスタコラ逃げちまうんだ」といわれ、その話にのつたところからはじまった。ところがこの考えは甘く、すぐに船会社にみぬかれてしまった。そして今度は、水産庁の漁業調査船が船医を捜しているという話をきき、これまた、マグロがたらふく食えるとか、見物ができるということで乗る気になったのだ。

船に船医として乗ることは決まったのだが、出港ま

で三日しかなかったのである。ここまでみてきてもこの人はいいかげんな人だというのがわかるが、めったに床をあげぬほど無精者な人なのに、その上、航海は初めてとなると、いいかげんプラスわからないということで、いろいろな友人にいわれたものを必要もないのにもって行ってしまったのである。

さて、いよいよ船にのったわけだが、船は船でも大きな船ではなかったのだ。ポンポン船とまではいかないと、世界を回る船としては小さいらしい。そうすると気になるのは船酔いのことである。最初はいろいろな船酔い経験者に話をきいてこわくなっていたが、自分より先に船に酔った人たちをみて、ちょっとずつ自信がついてきたのだ。結局この人は酔わなかったのだが……。

こうして、航海はつづき、いろいろな場所で、作者の好奇心の強さがよくわかる話があった。

途中では、船にのったら逃げようとしていたことを雑誌にのせられ、心配した船長がワインなどを飲ませてくれたなどもかいてあった。

あるとき、甲板次長が局部に圧痛を訴えて来、慢性盲腸炎らしいということがわかった。しかし、作者はいいかげんな人で、宇宙精神医学研究室主任をやっていたぐらいで、オナカの手術なんぞあらかた忘れてしまっていたのである。いつもはいいかげんな作者も、この時はさすがにあせって、いろいろと抗生剤を使ったり、英文で症状や経過などを書き入院の手続きなどしたりした。

航海も終わりに近づくと、体調もみな疲れ気味で、誰もがもう一刻も早く日本に戻りたいと思っているのに、作者は船を奪って逃げる計画をたてたりしてまだ遊び足りないという感じだった。

もう寄る港もないとなると、好奇心の強い作者もさすがに力がなくなり、なにをやってもおもしろくなく、ナマケモノの生活をするようになってしまった。

この話は、このような作者の航海の出来事を、作者の少年のような好奇心で、長い航海中での船中のことや、寄航地での出来事を、どこまで本当で、どれがウソかわからないほどおもしろ、おかしく書かれている。おもわず楽しくなる本でした。

## 「茶の世界史」

(角山 栄)

2A 大原 晋二

この本は日本や中国によってオランダ・イギリスなどのヨーロッパ諸国に広められた茶のことを詳しく書いたものである。自分がこの本を選んだ理由はどうしてヨーロッパ人が東洋人の茶を発見し、茶に魅せられ、茶を飲むようになったのか。どうして茶がコーヒーを抑えて国民的飲料となったのか。また茶を伝えた東洋では茶に砂糖を入れないのに、イギリス人はどうしてミルクと砂糖を入れて飲むようになったのか。こうした疑問がつぎからつぎへと湧いてきたからである。

この本の内容は大きく2つに分けられている。第一部は文化としての茶について書かれている。また第二部は商品としての茶をとりあげている。第一部はヨーロッパの人々が初めて東洋へ来て初めて茶を知った十六世紀中頃から始まる。彼らは単なる飲み物としての茶ではなく、茶の湯に代表される「文化」としての茶に興味を抱いた。茶がヨーロッパに導入されたとき、それはイギリスにおいて最も適合的な飲料として定着し、イギリスはそれを紅茶文化として仕立て上げた。しかし東洋の緑茶文化が芸道、精神文化へ昇華したとすれば、紅茶文化はそれとまったく逆の物質文化として形成されると共に、茶は「文化」から資本主義的「商品」になっていく。そうした過程を書いたものが第一部である。

第二部は開港によって「文化」から世界市場のための「商品」とされた日本茶の命運をテーマとしている。日本の茶は室町時代以来「文化」を形成してきた。それが「商品」となり世界市場へ放り出されたとか、日本茶はインド・セイロン紅茶に負けたとかいったことが書いてある。

「日常茶飯事」というが、我々は毎日なにげなく茶を飲んでいる。この本を読んでただの茶も、古い歴史を経て世界的な飲料となったのだと感心し、手もとの紅茶の香が高く感じられる今日この頃です。

# 随 想

## 本を読むことについて

5M 茶 谷 昌 樹

僕が本を読みだしたきっかけは、小学校の頃感想文の宿題をするためでした。その頃から社会科、ことに歴史が好きだったので「源頼朝」についての本を読みました。それからというもの、吉川英治、司馬遼太郎、山岡荘八など歴史に関する本ばかり読み、文学書は一冊も読みませんでした。文学書なんて読んでも役に立たないし、めんどくさいと思ってたからです。

ところが中3の夏再び感想文の宿題がでた。その頃は、本を買う程小遣いに余裕がなく、家に転っていた本を読んだ。そして夏休みも終わったある日、模擬テストがあり、たまたまその本の一部分が出ていた。そのためいつもは60点前後の国語で94点という高得点がとれ、「読書ってもんは、どんな形で役に立つかわからんもんじゃのー」ということを実感しました。

それからは歴史以外の本を読みはじめ、手はじめに自分の好きな時事に関する本、そして文学書へと入りました。

今現在、それが表だって役に立ったことは、ほとんどありません。まあ時事問題は就職に関しては、きつてもきれいな関係なのでその辺は役に立ったと思う程度です。しかし、この頃本を読む事により次のようなメリットがあると思いはじめました。

人物史なら過去の英雄、文学書ならそれに登場する多種多様な人物の生き方、物事に対しての考え方がわかり、自分の人生や物事を判断しなければならない時に非常に参考になります。

また誰でもいろんな分野の本を読むと思いますが、自分の好きな分野のものを多く読み、他の分野の物はある程度読むという感じだと思います。それにより、多くの知識が身に付き、T字の状態、つまり得意分野においては深い知識を持ち、その他の分野は浅く広い知識がもてるということです。さらに読書により、読

解力がつき、物事を正しくとらえ、正しい判断ができるようになると思います。

その他には、集中力や根気がつくなどいろいろなメリットがあり、本を読む事で損をすることは何一つ無いと思います。

このように本というのは人の生き方、考え方に大きな影響を与えます。その証拠とっては何ですが、昔中国を統一した秦の始皇帝が人々が本を読み、様々な思想をもつことを恐れ「焚書坑儒（思想統一のために本を燃やす）」という政策をとっています。

だからみなさんも数多くの本を読んでもらいたいと思います。

しかし、本ならなんでもいいというわけではありません。読む本によっては、変な方向へ走る原因になる可能性もありますし、そういう人も見てきました。だから読むべきものと、そうでないものをしっかりと見きわめてより多くの本を読んでもらいたいと思います。

でも実際には、時間的な余裕などからそうたくさんは読めないと思います。そこで思うのですが、そういう人は新聞を利用すればいいと思います。新聞には、政治・経済などをはじめ多くの情報やいろんな人の考え方や意見が載っています。これをいかさない手はないと思うのですが。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」

○「図書室での飲食はやめよう」



## 建築における読書の意味

建築学科教官 篠部 裕



(by 4A 林 健次郎)

ここでは、私が建築の勉強とその読書の役割(意味)について、日頃感じている事を2、3述べてみたいと思う。

建築を勉強するに望ましい環境としては、まず多くの立派な建築(有名建築)が、自分の周囲にあることだと思う。この条件が満たされる環境は、文化的大都市である。例えば日本では東京であり京都であり、アメリカであればニューヨークであり、フランスであればパリである。そのような環境の中で建築を勉強すると、いやが上でも立派な建築を目の当たりにして勉強するわけであるから、自然と有意義な勉強ができる。

しかし、我々が今建築を勉強している環境とは、残念ながらそのような望ましい環境ではない(2、3のすばらしい建築もあるにはあるのであるが……)。従って、このような環境の中で建築を勉強するに当たっては、1年に何日間かすばらしい建築がある望ましい環境に足を運び、建築を勉強することが必要である。しかし、現実として、この様な環境に年間多くの日数足を運ぶことは、経済的にも時間的にも困難である。この様に望ましい環境で建築を勉強できない場合、即ち地方で勉強する場合(例えば呉)は、中央と比較して特に読書ということが、建築を勉強する上で非常に大きな意味を持つと思う。

建築を勉強する上での必見図書(専門書)というのは幾つかあるが、これを読むにはある程度の専門知識

が必要とされ、誰でもすぐに読めるというものではない。1年生、2年生に『[住居論][住宅論]』といった本を読んで理解しなさい』と言うのは無理な話である。しかし、この様な1年生、2年生でも建築写真集、作品集といったビジュアルなものを見ることは可能であり、このようなものを通して読書を始め、建築に親しみ、建築を勉強することは意義ある事と言える。

従って、必見図書を読むことはある意味である段階で必要であるが、その他の雑誌系統の本を読むことも必要なことである。写真集、作品集を通して建築に関する知識を高める事は大いに可能であり、1年生、2年生においてはこの写真集、作品集を見ることから建築に親しみ、建築に慣れて行けばよいと思う。そして、学校の勉強で専門知識がある程度増えてきたら、\*\* \*論といった本を読めば良いであろう。

まずは、写真集、作品集等を見る事から始めるべきである。その中で興味ある建築/街に出会ったらその写真の隅にあるコメント(説明文)を読んで見れば良い。1冊その様な本に出会ったら2冊目の本を捜して読んでみる。後は、その繰り返しであると思う。何の本を見たら良いのかわからない場合は、私が相談にのります。何冊かの本は私が紹介しましょう。

本を通しての建築の理解と実際のもの(建築/街)を通しての建築の理解とは、やや違う部分がある。しかし、何はともあれ何等か方法を通じて建築を一つ一つ理解して行くことが我々にとっては必要である。特に我々が勉強している現在の環境にあっては、建築を勉強する上で読書はきわめて有効な方法である。その点を、各学生は理解して、建築を勉強して行ってもらいたい。



(by 4A 宮井正人)

## 海外だより

### ガンネの「ドイツ通信」

一般科目教官 岩根三邦

思い出多きゲーテの学校 ドイツ到着直後の困惑振りについては、既に報告した。(『呉高専だより』23号 [1987年7月発行] 7頁、「ドイツ困惑記」参照。) そこで今回は、その後の2カ月間を過ぎたドイツ語学校、ゲーテ・インスティトゥート・マンハイム (Goethe-Institut Mannheim) での出来事を中心にお話し、皆さんへの便りとしたい。

留学先、マインツ大学の指導教授の勧めもあって、まずこの学校に通うことからドイツでの生活を始めたわけだが、多くの色鮮やかな思い出を残してくれ、ここがいわば「私のドイツ」の原点となったように思う。では、そのいくつかを紹介しよう。

下宿のFrau Regner 開校日に受付で下宿の希望を聞かれ、「少しは遠くても大きな部屋、専用のシャワー付」を望んだところ、マンハイム市内の学生寮ではなく、ライン川を渡った隣町Ludwigshafenのレーグナーさん宅を紹介された。彼女は「おばさん」と呼ぶには余りにも魅惑的な未亡人で、教養豊かな職業婦人だった。暖炉のある部屋に通され、ワインを御馳走になって挨拶を交わしたが、彼女もテニスが趣味ということで話が弾み、二人で2本も空けてしまった。勿論、私がほとんど全部戴いたわけで、初対面から飲み過ぎてしまったのは、我ながら情無い。

2階の全部、つまり机・ベット・大きな洋服ダンスの備えてある部屋2つ、簡易台所の付いた食堂、それにバス・トイレを自由に使ってよいと云われ、玄関と2階の鍵を渡されたのだが、少し古いが何もかも大きな作りで私は大いに満足した。学校に近い所を希望し、狭い学生寮に入れられた日本人が、「このバスの中で泳げるんじゃないですか？」と羨んだ程である。しかしその彼女も、トイレの度に便器の中に落ち込むのではないか、という恐怖と私は戦わねばならなかった事ま

では知らない。

残念ながら、このフラウ・レーグナーとのテニスは彼女の病氣入院で実現せず、2カ月間のほとんどを私はひとりぼっちで過ごしたのである。ヒューズが飛んで丸2日間真暗の時も、運悪く丁度週末でどうすることもできず、私はただビールを飲んで、月曜がくるのを待つしかなかった。

G IIIのクラスは14カ国・18人 ゲーテのマンハイム (人口30万の美しい文化都市) 校にはGrundkurs (初級コース) I・II・III、Mittelstufe (中級) I・II・IIIの各コースが設けられており、(因みに、中級IIIの終了試験に合格すると、大学入学資格の内ドイツ語の試験が免除になる) 私は予めミュンヘンの本部に送ったペーパー・テストで中級に指定されていたが、ある人の助言もあり面接によるクラス分けの際G III (ゲー・ドライ)を希望した。しかし、これで正解だった。というのは、このクラスでさえほとんどの人が、既に十分ドイツ語が話せたからである。中でも、ユーゴの精神科医イーワン、ポーランドからの亡命歯科医ペーター、ギリシア美人のバージニア、生れと育ちはスペインだが、両親がドイツ人のコリーナ、ドイツ人を夫に持つブラジルの幼稚園の保母さんクリスティーナ、彼らの会話力には辟易で、何でこんな人達が初級なのかと呆れてしまう。

君、訛ってるよ! しかし、親愛なる呉高専の皆さん、よく聞いて下さい。彼らの発音や文法は実に好い加減なのである。例えば、人称代名詞一人称単数「私は」というのは、ドイツ語ではichと書き、「イヒ」と発音するという事くらいは日本人なら大抵の人が知っている。それなのにクラスの心優しいフランス人イザベルは「イッシュ」としか言えないし、立派な髭のインド人物理学者アマラバティは「イック」と平気で発音するし、もっとひどいのは「イッチ」なのである。(機長やスチュワーデスの機内アナウンス等も大抵は、多かれ少なかれ訛っている。)

文法についても同様で、話法の助動詞の後には当然不定形が後置されるが、平気で現在形をもってくるといった類の誤りを犯すのである。つまり、会話の能力

に比べて文法の知識が貧弱で、その点の矯正のためにこそ、決して安くはない授業料を払って彼らはこの学校に来ているのである。

その逆が、我々日本人や中国・タイからの学生で、ペーパー・テストでは良い成績を取るのに話せないのである。しかし、最初のテストで私は、満点に近い点でクラスのトップとなり、「文法が一番」とばかり以後大いに皆の尊敬を集めたものである。

日本人クラスメート マンハイム校全体で10人位の日本人が籍を置いていたようであるが、私のクラスには5人もの人があった。何かと不自由な異国の空の下、互いに助け合い、瞬く間に旧知の如き間柄となるのである。年齢、性を越えて。しかし、授業の時にかたまるとドイツ語の勉強にならないので、敢えてそれぞれ外国人の間に席を取った。この学校で知り合った日本人の内、二人を紹介しよう。

まず一人は、クラスの最高齢者、76歳のK女史である。九州のある大学を停年退職後、創作舞踊の研究所を開いておられる方で、多少腰は曲っているものの、一度曲が流ればその身体の動きはしなやかそのもので、全く別人の如くなってしまうのには、クラスの一同驚嘆したものである。20数年前ドイツ留学の際、ゲーテの学校に通わなかったことが心残り、此の度思い立って入学の運びとなったのだそうである。その真摯な向学心には大いに頭が下がると共に、勇気付けられる思いがしたもので、クラスのお別れパーティに当っ

て担任のゲリケ先生は、自分の倍以上の年齢のこの遠来の淑女にバラの花束を贈って敬意を表した程である。

便所ペニヒって知ってますか？ 続いて紹介するのは、私の一番の友となった、独身時代はエンゲル係数100のT大助手、Kさんである。S高専の卒業生ということもあって互いに最初から気を許し、クラスは違ってもよく行動を共にしたものだ。特に昼食は、マンハイム大学のメンザ（Mensa学生食堂、驚く程安い旨くない）を敬遠して、二人で近くのレストランで飲み食いするのが常だった。何しろ彼はエンゲル係数100私は「在研」（文部省在外研究員のことを当地では、羨望の気持を込めてこう呼ぶ）の「お金持」だったから。

その彼は、フンボルト財団からの奨学金をもらっていたにも拘らずドイツ語はほとんどできず（奨学金取得のためのドイツ人との面接試験は英語で通したのだそうである）、ストレスも溜まって一カ月余りも下痢が続き、学校でもよくトイレに走っていた。しかし、皆さん、一旦学校を出れば日本のように無料のトイレは、ヨーロッパではほとんど皆無なのです。特に男性の小用の場合を除いて。マンハイムでは大体50ペニヒ（100ペニヒ＝1マルク≒80～85円）だった。だから彼にとっては50ペニヒ硬貨は生活必需品であって、これが1枚でもなければ、たとえ他の高額紙幣をいくら持っていようと、大変なことになるのである。（コイン式トイレの前で、苦痛に歪む彼の顔を想像せよ）そこで



▲鄙びたワインの町、アルデンバンベルグにてドイツ白ワインを楽しむ筆者

彼は、毎朝子供と奥さんにこう言われて下宿を出るのである。「パパー、便所ペニヒ持ってるー？」

女心とドイツの空 我々を殺すのに刃物は要らない、おいしい料理と冷たいワイン（Kさん）かビール（私、ドイツの白ワインを賞味するようになったのは本場マインツに移ってから、写真参照）の一、二杯もあればそれで十分といった色気より食い気の二人だったが、毎日わんさと出されるゲーテの宿題には共に閉口だった。日に5時間の授業を受けるだけでも大変で、昼食後下宿に帰りベットに転がっていたら疲れて眠ってしまい、目が覚めたら真暗ということも何度もあったが、その上宿題に数時間を要するのでは、おちおち眠ってもおれないのである。それに私の場合は、下宿から学校まで徒歩と電車で1時間は優に掛かり、1時間目は8時に始まるので、ジョギングをするためには遅くとも6時には起きねばならず、日に日にゆるくなってゆくズボンに一時は恐怖すら感じたものだ。（2カ月で6キロ痩せた教授もあるが、不思議と女性の場合は逆に肥える人が多い）

不思議と言えば、女心も私には不可解だが、ドイツの天気も奇妙だった。さっきまで青い空だったのに突然大粒の雨。それも長続きせず、一日に何度も降りたり止んだり。したがって寒暖の差も激しく、コートと傘は必携であり、仕方なく私も折り畳み傘を百貨店で求めたが、その折り畳み方の発想が日本のものと異なり面白かった。

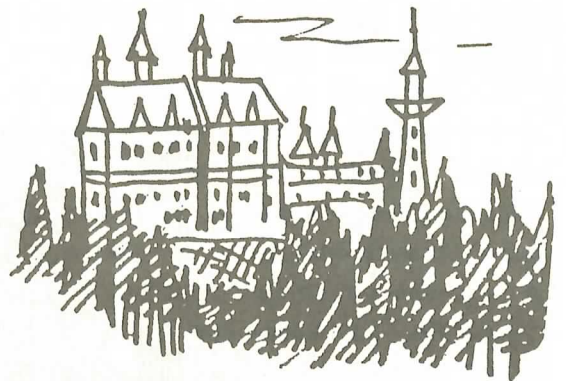
いずれにせよ、ゲーテの日本人（男性）の間では、変わりやすきもの、それは「女心とドイツの春の空」ということになっていた。

Auf eigene Gefahr 日本と違うなあ、と感じたことをもう一つ。見出しのドイツ語は、「アウフ・アイゲネ・ゲファール」と読み、「自分の責任で、危険自己負担で」というほどの意味で、この思想が徹底し、日本のように一律に禁止ということは無かった。例えば、Auto-bahn（高速〔自動車〕道路）では最低速度は指示されることはあっても、最高速度が制限されることは無いのである。したがって、私が愛車OPEL ASCONAで追い越し車線を150kmで走っていると、後ろからメルツェーデス（こちらではベンツとは普通言わない）が接触せんばかりに近づきライトで車線を空けるように合図し、その又後からボルシェが200kmを越えるスピードで追い越し、みるみる内に遠ざかって行くという恐

怖の世界となるのである。つまりドライバーはそれぞれ、自分の車の走行能力と運転技術に応じて走れ、ということなのであり、猛スピードで事故を起してもそれは「自分の責任」なのである。

したがって、ローレライの崖の上にも垣やロープは無く、ただ「Auf eigene Gefahr」の看板が有るのみで、マインツ大学・哲学棟の近くの林の散歩道の入口にもちゃんと次のような掲示が立っている。「この道は冬期には凍結して危険です。もし足を踏み入れる場合はauf eigene Gefahr!」万一の場合も当方は責任を負いませんというわけである。

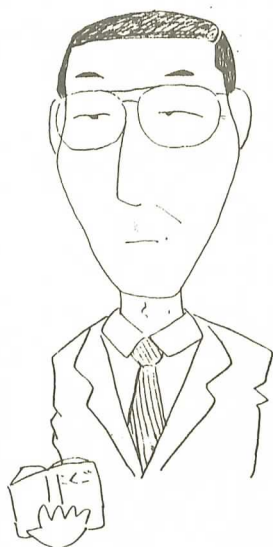
（パリにて、1987年8月24日）



## 窯場めぐり

### 山陰の窯場を訪ねて(一)

一般科目教官 榎本 紘二



(by 3A 土居 一志)

焼き物に興味を抱いて、各地の窯場を訪ねるようになってかれこれ15年近くになる。広島在住の頃は、釣行も兼ねてよく出掛けたものだ。横川から一路R54を可部まで北に向かって車を進める。最近とみに交通渋滞はひどく、加計分かれ交差点まで50分を要した。真っ直ぐに北へ向かえば三次を経て松江に至る。今日はそこを左に折れ、R191を山陰の浜田に出るコースを選ぶ。加計の町まではカーブが多いものの、可部までの渋滞を思えばわりと楽なドライブである。太田川を左手に見ながら加計に入る。街並みの中程で一時停車、通りの右側に鯛焼屋が見える。この店の鯛焼は実においしい。二重焼屋は多いが、鯛焼屋は希れである。最近、祭りの夜店などで見かける位であろうか。いつものように急いで店に駆け込む。今日は幸運である。待たなくて済んだ。五箇包んでもらう。運転しながら口に運ぶ。この店のあんこは自家製である。既成の営

業用あんこではこうはいかない。

町を抜けるとR191は左に折れて三段峡方面に続くが、右に折れてR186に沿って進む。三つ目が口に入る頃には、王泊ダムを通り過ぎて大佐山に到着。ドライブ・イン大佐で少しの休憩を取る。車から出ると爽やかな高原の空気である。ドライブ・インの裏山はスキー場になっているが、季節は夏であって、キリギリスがしきりにチョンギース・チョンギースと鳴いている。県境の傍示峠を下れば島根県である。右手に雲月山を見ながら少し走らせると、浜田15km・雲城2kmの標識が見え、左手に標高668mの雲城山が見えてくる。ここより10分弱で、最初の訪問地の雲城山焼の窯元に到着する。目印は水車小屋のある建物である。少し奥まった所に展示室と仕事場があり、その裏には登り窯が築かれている。窯場辺りでチョンマゲを結った老人らしき人が目に入った。この人が陶主の岡本初一氏である。その堂々とした風格にふさわしく、号を雲山と称している。五十年間の陶芸から作られる日用雑器には、土の持つ素朴さと温かさが感じられ、高台の削り方を見ても氏の丁寧な仕事振りが伺われる。湯呑・砂糖壺・大小の皿・急須など多くの器、釉薬の種類も豊富で焼き上がった色合いもまた多彩である。薬灰釉（乳白色）の上に織部釉（緑色）を流し掛けした器は、それらの中でも特に良かった。白色の地の上方に、緑の斑点や細い筋の紋様が現れている。更にその緑色の部分の中に赤味を帯びた点々が、はっきりとはしないが浮かび上がって見える。銅を含んだ釉薬は酸化炎では緑色に、還元炎では赤色に発色するが、その赤味は窯の中で、微妙な炎の働きによって生み出されたものであろう。まさしく窯変と言われるものである。そんな湯呑を一つ買った。国道に面した店では、氏の焼かれた食器でコーヒーなどを飲ませている。

次の窯場は旭町今市にある雪舟焼の窯元である。

雲城山焼窯元からトンネルを二つ通って少し行くと、右手に美又温泉入口の標識が目に入る。そこを右に曲がってR186から県道へと入る。15分程で、直進→美又温泉、右折→旭町今市の分岐点に至る。近くにある有福温泉程には名前の知られていない美又温泉だ



が、少しぬるめの非常に和らかい良質の温泉として、知る人には知られている。簡易保険保養センターがあって利用には便利である。溪流の片側に5・6軒の旅館が並んだ山あいの小さな湯治場である。この分岐点から25分位で窯元に到着する。陶主は二代目の福郷惣作氏である。若いが目されている陶芸家の一人である。聞くと、私より一つ年下だとか。島根県下にはもう一つ雪舟焼がある。こちらは雪舟庭で有名な益田市医光寺の境内にあるが、陶主の福郷喜三郎氏（号を徹と称す）は旭町の先代の実弟で。今市の方は加賀羅山麓に所在する所から、俗に加賀羅雪舟焼と区別して呼ばれている。三年程前、広島本通りにあるトミタ・ギャラリーで開かれた二代目従兄弟同志の個展を拝見したが、その時初代陶主の他界されたことをお聞きした。ロクロの上の粘土を自由自在に皿にひいたり、壺に形を変えたりする手品のような技を子供達に見せて

くださった。初めて訪ねたあの時の先代の人柄が偲ばれた。花器・茶器・日常生活品など幅広い分野のものを焼いている。雪舟に傾倒して修業を積んだと言われる程、その茶器に於いては殊にすぐれたものがあつた。中でも錆雲という技法は先代によってあみ出されたもので、高く評価されている。石見地方では今でも語り草になっているそうである。辰砂釉（赤色）・青磁釉は特に美しい。湯呑など大部分の器には、下方部分に飛雲の紋様が描かれているが、この紋様を施すのが雪舟焼の特徴である。今回の訪問では、迎春用の青釉の徳利と猪口二つを買った。一方、京都から来ましたと挨拶していた女性二人——お茶の先生であろうか——は、何十万円もの買い物であった。先代陶主はその女性客に、焼物についての話を始められた。

私は、次の訪問地浜田の尾上焼に向うべく、そこを後にした。



## 郷土の歴史

## 厳島合戦前後の呉

一般科目教官 宇根俊範



(by 1A 大下 恵)

弘治元（1555）年、毛利元就が陶晴賢を倒した厳島合戦は、毛利氏が中国地方の戦国大名として成長していくうえで重要な画期となった戦いであり、歴史の授業でも簡単にとりあげてはきたが、ここではこの厳島合戦前後の呉地区の情勢を概観し、この戦いが呉地区にどのような結果をもたらしたかについて述べてみよう。

南北朝期、防長二国（現山口県）の守護大内氏は、安芸<sup>とうさいじょう</sup>東西条（現東広島市にあたる寺町村・御菌宇・東之村・寺家村・三方・原之村・飯田村・したみ村・上戸村・田口村・三永村・黒瀬町の黒瀬・乃美尾、福富町の久芳、河内町の戸野郷・郡戸村・河内村、安浦町内海、川尻、安芸津町三浦、呉市の広浦・仁賀田、安芸区阿土村、熊野町等を含む広大な領域。「平賀家文書」による）を拠点として安芸国に進出してくるが、東西条と防長本国との通路を確保するためにも呉は大内氏にとってまことに重要な位置にあった。当時、呉を拠点とする海賊衆（山本、桧垣、警固屋氏ら）は呉衆と呼ばれ、能美（能美島）、多賀谷（倉橋・蒲刈島）氏らとともに大内氏に属し、有力な大内氏水軍の一翼を担っていた。たとえば、応仁の乱に際しては、西軍に

応じて上洛する三万余騎の大内政弘軍の海賊衆先陣の役をつとめており（『経覚私要抄』応仁元・7・3条）、大永3（1523）年の出雲の尼子経久の安芸国侵攻に際しては、矢野の野間氏（尼子方につく）によって本拠地を占拠されてもおお大内氏にとどまり、大内氏の反撃には大内軍司令官陶興房、小早川水軍乃美備前守の呉千束要害（現在の自衛隊呉地方総監部、呉警備隊付近。近世の呉町あたり、千足、洗足川がある）攻略に参加していた。

呉衆の山本氏は、『芸藩通志』に「杉迫 和庄村にあり、山本甲斐所居」とみえ、山本甲斐とは、天文年間大内氏水軍として活躍する山本甲斐守房勝のことであって、この杉迫が山本氏の居城と考えられる。現在の和庄登町（旧城山町）の明法寺（和庄中学校の隣り）一帯の尾根部分が杉迫城にあたり、海に面して突出した尾根を利用した海賊城であったと思われる。桧垣氏は広・阿賀に本拠を置き、警固屋氏は『芸藩通志』にみえる堀城（現在の呉市役所警固屋支所上方の丘陵）や小浜山城（音戸の瀬戸の対岸、現在の貴船神社の丘陵）を居城としていた。

天文20（1551）年、大内氏は家臣陶晴賢によってほろぼされ、ここにも毛利氏と陶氏の決定的対立をみるわけであるが、天文23（1554）年、いったんは人質をだして毛利方についていた呉衆は、差出した人質を犠牲に山本四郎賢勝が「呉惣衆中」を率いて陶方につき、陶氏と運命を共にすることとなる。これと同時に呉衆の領地は小早川氏家中の領するところとなり、山本の家名も小早川の家中有田拾次郎が相続して乃美（浦）浜部宗勝の配下に属することとなった。

呉衆の総帥山本氏は房勝・賢勝二代にわたって、陶氏の偏諱（興房・晴賢）を賜わっており、陶氏との臣従関係の深さが知られるが、これが呉衆を没落・解体へみちびいていったのである。

参考 『広島県史』中世

『角川日本地名大辞典』34広島県

下向井龍彦「中世の呉」

（「いりふね山」創刊号）

## 図書館を訪ねて

### 近畿大学工学部図書館を訪ねて

図書係長 土佐智義

暑い夏の陽ざしを受けて近畿大学工学部の正門を入ると、ヒマラヤスギの立ち並ぶ中で蝉しぐれの歓迎を受けた。訪れた図書館はキャンパスのほぼ中央に白い殿堂さながら、堂々とした佇で建っていた。

富田館長、松田司書の丁寧なご案内で近畿大学工学部図書館の実情をおきし、館内の見学をさせていただいた。

同図書館は、県内の大学図書館では相当上位にランクされる規模、及びスタッフで図書館業務の機械化に取り組んでおられる。昭和56年にコンピューターの学習を開始され、昭和58年5月にはオフコンで貸出・返却サービス、同年8月からは和書雑誌検索サービス、同年11月からパソコンによる雑誌管理システムを稼働されるという精力的な努力をなされた。

同時に検索に必要なデータの蓄積を始められ、昭和62年現在では下記概要のとおり、全蔵書のデータが図書館業務に必要な殆どの項目をもって入力されている。このデータ入力に大きな力を発揮したのは大学全体の理解により導入された「J/MARC」という国立国会図書館の目録情報である。この磁気テープから必要情報を即座に自館情報へコピーすることによって、現在、本校で行っている手作業による一連の整理業務の約5倍のスピードアップがあったということである。

こうして、余った時間は利用者の要求を満たすべくサービスの向上に利用することができる。本校の図書館業務は図書の整理と番人程度のことしかなされていないので、一刻も早くそうなりたいと願っている。サービスの如何なるものかを実感したい方は、とりもなおさず、近畿大学工学部図書館に出向いていただければ、その一端を垣間見ることができるでしょう。（原則として、学外者の利用は禁止のため、念のため予約して行ってください。）

もうひとつの特徴は雑誌の共同利用を図ることと重複による資料購入費の節約を図るため、全雑誌が図書館に集中して管理されていることである。図書館に向かう労はあるものの、図書館に行けば、何時でも、どんな資料でも利用できるという大きなメリットがあります。（特別の場合を除いて図書館の閉館はない。）

以上、簡単に記してこの訪問記を終わります。

#### 図書館の概要

##### 1. 蔵書

図書 約10万冊（和書 約7万冊、洋書 約1万冊、雑誌 約2万冊）

所蔵雑誌種類数 815種

##### 2. 建物

面積 1,612㎡

座席 136席

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」



○「図書室での飲食はやめよう」

# お知らせ

## 1. 資料配置の変更について

熱心な方は既にご存知とは思いますが、8月中旬より図書室の資料及び閲覧機の配置が一部変わりました。新しい配置図を記しておくますので、よく確かめて資料を探してください。

移動したのは、主として文庫、新書類です。

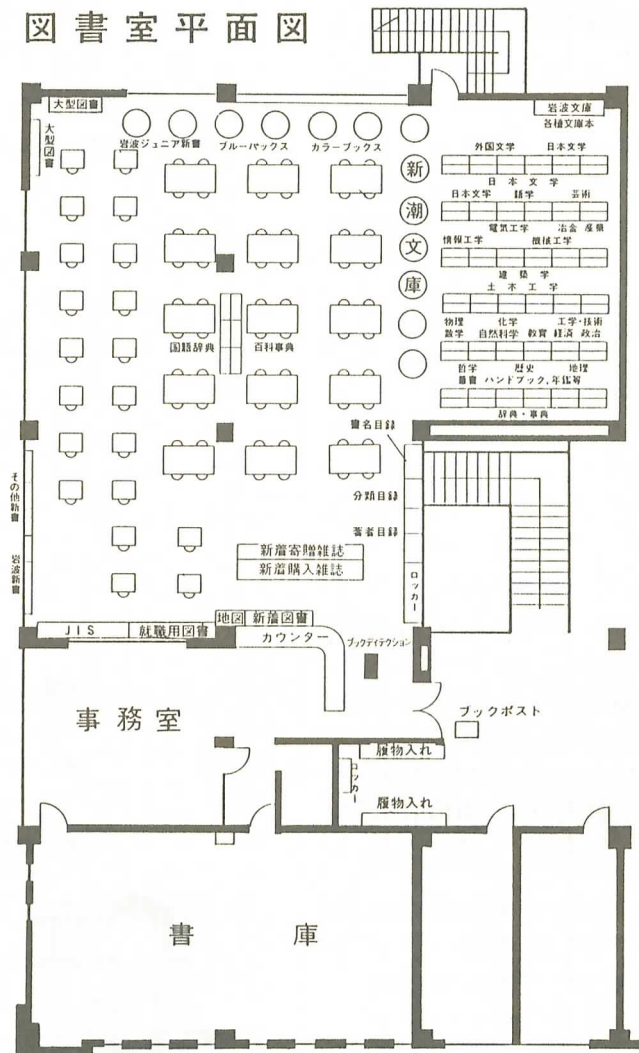
## 2. ブックディテクションの設置について

既に回覧や掲示などでお知らせしたとおり、去る9

月14日からブックディテクションシステム（無断持出防止装置）が稼働しています。自由に図書室を利用できるようにするためには、皆さんの協力が是非必要です。ウツカリして、貸出手続きを忘れることのないように気をつけてください。

万一、誤ってアラームが鳴っても、驚くことなく原因調査にご協力ください。又、貸出手続きをした図書を図書室へ持ち込む場合、必ず係員に申し出てください。（アラームは心臓によくありませんよ。）

図書室平面図



## 新着図書案内

(昭和62年1月～7月受け入れ図書室備付分)

### > 0 総 記 <

学問における価値と目的 (竹内 啓編) 東京大学出版会  
 情報の科学 九州大学出版会  
 絵ときコンピュータ (ピーター・ローリー) 東京書籍  
 並列処理 (村岡 洋一) 昭 晃 堂  
 図解コンピュータ百科事典 (江村 潤朗) オ ー ム 社  
 コンピュータ英和・和英辞典 (日本ユニバック編) 共 立 出 版  
 岩波FORTRAN辞典 (西村 恕彦等) 岩 波 書 店  
 マイクロコンピュータ辞典 (Charles J.Sippl) 共 立 出 版  
 和英情報処理用語32000 (『工業英語』編集部編) インタープレス  
 知識の学習メカニズム (古川康一等編) 共 立 出 版  
 図の体系 (出原栄一等) 日科技連出版社  
 音声の合成と認識 (城戸 健一) オ ー ム 社  
 知識ベース入門 (大須賀節雄) 〃  
 ソフトウェア産業の実像 (霧生 廣) につかん書房  
 任天堂の秘密 (上之郷利昭) 現 代 出 版  
 エキスパート・システム入門 (安部憲広等) 共 立 出 版  
 マイクロコンピュータ (樹下 行三) エレクトロニクスダイジェスト  
 1:基礎編  
 2:プログラム編  
 3:設計編  
 実用マクロアセンブラ (河西 朝雄) 技 術 評 論 社  
 オペレーティングシステム (前田 英明) オ ー ム 社  
 TK-85で学ぶマイコン制御とアセンブラ入門 (野澤繁之等) 技 術 評 論 社  
 初級マイクロコンピュータ応用システム開発技術者受験読本 (中野 靖夫) 日刊工業新聞社  
 2種情報処理受験ポケットブック 改訂2版 オ ー ム 社  
 コンピュータ・アーキテクチャ (坂村 健) 共 立 出 版  
 計算機アーキテクチャ (齊藤忠夫等) オ ー ム 社  
 エキスパートシステム (上野 晴樹) 〃  
 ソフトウェア学通論 (伊吹 公夫) 〃  
 ソフトウェア作法 (Brian W.Kernighan等) 共 立 出 版

MS-DOSハンドブック (Richard Allen King) オ ー ム 社  
 Lattice Cの使い方 (Lattice社編) 工 学 図 書  
 ソフトウェア工学ハンドブック (榎本 肇編) オ ー ム 社  
 計算とアルゴリズム (浅野孝夫等) 〃  
 例題によるCプログラミング (J.Emmett Beam) 共 立 出 版  
 プログラム技法 (二村 良彦) オ ー ム 社  
 オペレーティングシステムの基礎 (A. N. ハーバーマン) 培 風 館  
 プログラム書法 (Brian W.Kernighan等) 共 立 出 版  
 Prologのソフトウェア作法 (黒川 利明) 岩 波 書 店  
 Cプログラミング 改訂2版 (Jack Purdum) 丸 善  
 実践コンピュータグラフィックス (David F.Rogers) 日刊工業新聞社  
 C言語初恋レクチャ (庄司 涉) 誠文堂新光社  
 アルゴリズム+データ構造=プログラム (Niklaus Wirth) 日本コンピュータ協会  
 増補新版 全国図書館案内 上、下 (書誌研究懇話会編) 三 一 書 房  
 図書館・情報学のための調査研究法 (緑川信之等) 勁 草 書 房  
 増築と改築 (日本図書館協会施設委員会編) 日本図書館協会  
 参考業務 (北嶋武彦編) 理 想 社  
 全集総合目録'86 最新版 (出版年鑑編集部編) 出版ニュース社  
 暖かい本 (稲生典太郎) 沖 積 舎  
 日本大百科全書 小 学 館  
 14:そーたろ  
 15:たわーつん  
 16:てーとく  
 大疑問 平 凡 社  
 ブリタニカ国際年鑑 1987ティビーエス・ブリタニカ年鑑  
 偶然と必然 (竹内 啓編) 東京大学出版会  
 無限と有限 〃 〃  
 NHK文化講演会 14 日本放送出版協会  
 ギネスブック'86 (ノリス・マクワーター編) 講 談 社  
 1億2000万人の平均本 (雑学研究会編) 永 岡 書 店  
 現代学生七つの大罪 (縄 榮郎) 啓 文 社  
 世界ビギニング・データブック (デニス・サンダース) 文 化 出 版 局  
 朝日年鑑 1987年版 朝 日 新 聞 社  
 中国年鑑 1986年版 - 1987年版 中 国 新 聞 社

科学の散歩道 (水羽 和夫) 共立出版  
 続・科学の散歩道 ( ) 〃  
 朝日選書 朝日新聞社  
 317: 近代の秀句 (水原秋櫻子)  
 318: 円の百年 (刀祢館正久)  
 319: 童話と樹木の世界 (筒井 迪夫)  
 320: 藤原不比等 (上田 正昭)  
 321: 二つの母国に生きて(ドナルド・キーン)  
 322: ノーベル賞の光と陰 (「科学朝日」編)  
 323: フューチャー・サイエンス  
 (G, ファインバーグ)  
 324: がん細胞の営み (佐藤 春郎)  
 325: アメリカ歴史の旅 (猿谷 要)  
 岩波セミナーブックス  
 20: 中世絵画を読む (辻 佐保子) 岩波書店  
 21: 憲法判例を読む (芦部 信喜) 〃  
 新訳漢文大系 明治書院  
 51: 墨子 下 (山田 琢)

> 1 哲 学 <

人間とは何か 九州大学出版会  
 生と死 1-2 (木村尚三郎編) 東京大学出版会  
 科学的方法とは何か (浅田 彰等) 中央公論社  
 近代日本哲学思想家辞典 (伊藤友信等編) 東京書籍  
 欲求心理学トピックス100 (齊藤 勇編) 誠信書房  
 夢とビジョン (木村尚三郎編) 東京大学出版会  
 オーラ・テクノロジー (井村 宏次) 三修社  
 量子力学と意識の役割  
 (ブライアン D. ジョセフソン等) たま出版  
 世界宗教史叢書 山川出版社  
 10 儒教史 (戸川芳郎等)  
 世界の神話 2-4, 7-10 筑摩書房  
 仏教とキリスト教 (ひろさちや) 新潮社  
 良寛 (田中 圭一) 三一書房

> 2 歴 史 <

世界現代史 山川出版社  
 20: ドイツ現代史 (成瀬 治等)  
 世界の大遺跡 講談社  
 2: ナイルの王墓と神殿 (櫻井清彦編)  
 歴史と人間との対話 九州大学出版会  
 ライシャワーの日本史  
 (エドウィン・O・ライシャワー) 文藝春秋  
 詳解 日本史重要人物辞典 教育社

最古の日本人を求めて (河合 信和) 新人物往来社  
 日本の古代遺跡 保育社  
 26: 広島 (脇坂光彦等)  
 平安京 (村山 修一) 至文堂  
 図録・都市生活史事典 (原田伴彦等編) 柏書房  
 うめぼし博士の逆・日本史 (樋口 清之) 祥伝社  
 1: 庶民の時代 昭和→大正→明治  
 3: 貴族の時代 平安→奈良→古代  
 昭和史事典 (昭和史研究会編) 講談社  
 太平洋戦争 第2版 (家永 三郎) 岩波書店  
 シルクロード (リュセツト・ブルノア) 河出書房新社  
 ベトナム秘密報告 下  
 (ニューヨークタイムス編) サイマル出版会  
 アラブが見た十字軍  
 (アミン・マアルーフ) リプロポート  
 ローマ帝国衰亡史 5  
 (エドワード・ギボン) 筑摩書房  
 アメリカ西部史 (中屋 健一) 中央公論社  
 坂本龍馬の後裔たち (中野 文枝) 新人物往来社  
 勝海舟 (石井 孝) 吉川弘文館  
 蓮の花は泥水にしか咲かない  
 (久保 道正) ミリオン書房  
 陸軍に裏切られた陸軍大将 (額田 坦) 芙蓉書房  
 何が私をこうさせたか (金子ふみ子) 筑摩書房  
 平塚らいてう (小林登美枝) 大月書店  
 「ご冗談でしょう、ファインマンさん」1~2  
 (リチャード・P・ファインマン) 岩波書店  
 シュリーマン (エーミール・ルートヴィヒ) 白水社  
 ダクラス・マッカーサー 上・下  
 (ウィリアム・マンチェスター) 河出書房新社  
 コンピュータ地図 (井上のぼる) 森北出版  
 世界の国立公園 講談社  
 6: アフリカ  
 角川日本地名大辞典 角川書店  
 34: 広島県  
 42: 長崎県  
 日本歴史地名大系 平凡社  
 4: 宮城県の名  
 10: 群馬県の名  
 オフロードツーリング林道日本一周  
 (寺崎 勉) 山海堂  
 1: 東京→宗谷岬  
 2: 宗谷岬→東京  
 日本の秘湯 露天風呂 講談社  
 極北に駆ける (植村 直己) 文藝春秋  
 北極点グリーンランド単独行  
 ( ) 〃  
 北極圏一万二千キロ ( ) 〃  
 朝日旅の事典 東京都心 朝日新聞社

東京路上博物誌 (藤森昭信等) 鹿島出版会  
 京都・大和路 講談社  
 新中国山地 (中国新聞社編) 未来社  
 NHK 大黄河 1-4 (井上 靖等) 日本放送出版協会  
 森と古城とメルヘンとドイツ  
 (森本哲郎編) 小学館  
 新ふらんす記 (篠田浩一郎) 白水社

「愛されたい」症候群 (古屋 和雄) 講談社  
 千日の変革 (堺屋 太一) P H P 研究所  
 回転する東南アジア

(ロバート・シャブレン) サイマル出版会  
 公務員試験 大学・短大卒程度 一般知能試験

(公務員試験情報研究会編) 一ツ橋書店  
 1：文章理解  
 2：判断推理  
 3：空間把握  
 4：数的推理  
 5：資料解釈

公務員試験 大学・短大卒程度 教養試験

( // ) //

1：社会科学  
 2：人文科学

国家試験資格試験全書 1987年版 自由国民社  
 七カ国目の駐日大使

(リー・クーンチョイ) サイマル出版会

軍事化から非軍事化へ

(グレン・D・フック) 御茶の水書房

平和を創る (Y M C A 国際平和研究所編) 勁草書房  
 暗黒日記 (清沢 洸) 評論社  
 核を考える 九州大学出版会

核の人質たち (Bernard J.O'keefe) サイマル出版会  
 図解による法律用語辞典 全訂新版 自由国民社  
 六法全書 昭和62年版 1-2

(平野龍一等編) 有斐閣

日本国憲法への質問状 (中川 剛) P H P 研究所  
 パスポートとビザの知識 (春田 哲吉) 有斐閣  
 国際版 路地裏の経済学 (竹内 宏) 中央公論社

経済の常識と非常識 (都留 重人) 岩波書店  
 線形計画法 上 (バシエク・フバータル) 啓学出版  
 21世紀の日本経済と企業 (館龍一郎編) 東洋経済新報社

マンガ 日本経済入門 (石ノ森章太郎) 日本経済新聞社  
 マンガ 日本経済入門 Part 2

( // ) //

Made in Japan (盛田昭夫等) 朝日新聞社  
 ビジネスマンの父より息子への30通の手紙

(キングスレイ・ウォード) 新潮社

岩崎弥太郎の独創経営 (坂本 藤良) 講談社  
 ダイヤモンド会社要覧 非上場会社版 1987

ダイヤモンド社

ダイヤモンド会社要覧 全上場会社版 1987 3月

//

N T T 変身の秘密 (塩沢 茂) エヌ・ティ・ティ・アド  
 電気・電子・通信工学科就職試験 理工学部

(加藤一編) 一ツ橋書店

危険物取扱者受験読本

(資格試験指導会編) 梧桐書院

### > 3 社会科学 <

データファイル世界の国々に 1984

(エコノミスト編) 原書房

日本人 九州大学出版会

知日家の誕生 (新堀通也編) 東信堂

アメリカを知る事典 平凡社

日本入門 日本とアジア

(早稲田大学アジア交流委員会編) 早稲田大学出版部

上：総論・日本の歴史と文化

中：日本の社会・日本の政治・日本の産業史

下：日本の経済・日本とアジア

ザ・ジャパニーズ

(エドウィン・O・ライシャワー) 文藝春秋

中華人民共和国・全資料 日中親善促進協会  
 岩波ブックレット 岩波書店

73：アジアの民衆 vs 日本の企業 (塩沢美代子)

74：チェルノブイリの放射能 (赤木 昭夫)

75：原発事故 日本では? (高木仁三郎)

76：ご用心! 巷にあふれるいい話「悪徳商法」撃退法

(木村 晋介)

77：誰のための援助? (村井吉敬等)

78：横浜事件 言論弾圧の構図 (海老原光義等)

79：「狂乱」地価への提言 (早川 和男)

80：火山噴火予知と防災 ドキュメント伊豆大島

(伊藤 和明)

81：国家は万能か (家永 三郎)

82：ブラウン管のなかのアメリカ (小中陽太郎)

83：「1%枠撤廃」をどう考えるか (平和構想懇談会)

84：売上税 (北野 弘久)

85：憲法はどう生きてきたか (渡辺 治)

86：精神科医の訴え (吉岡 眞二)

87：創造性を育てる (永井道雄等)

88：ふぞろいの林檎たちへ (山田 太一)

89：「エイズ」の知的対処法 (行友 良雄)

90：歴史を学校でどう教えるか (永原慶二等)

91：「無敵」なOLになる法

92：新聞記者の仕事とは

現代中国百景 (今田 好彦) 中央公論社

暮らしのための法律 '87 (加藤一郎等編) 第一法規出版

危険物取扱者乙種第4類 (西谷順吉編) 西 東 社  
 頭脳開発10日間

(リンダ・ベリゴ・ムーア) 主婦の友社  
 ワープタイピング (小澤 新一) オーム社

日本はこう変わる (長谷川慶太郎) 徳間書店  
 国際連合 世界統計年鑑 1982 (Vol.33), 1983/84 (Vol.34)

(国際連合統計局編) 原書房  
 日本アルマナック 1986 教育社

日本国勢図会 1987年版  
 (矢野恒太郎記念会編) 国勢社

不思議のフィリピン (中川 剛) 日本放送出版協会  
 災害と人間行動 (田中二郎等) 東海大学出版会

セックスウォッチング  
 (ミルトン・ダイヤモンド) 小学館

さらば、悲しみの性 (河野美代子) 高文研  
 性を教える (坂本 玄子) 農山漁村文化協会

思春期の性 (作田勉等編) 誠信書房  
 塀の中の懲りない面々 (安部 譲二) 文藝春秋

コンピュータ犯罪戦争 (室伏 哲郎) サンマーク出版  
 天災人災 ミサワホーム総合研究所

アメリカ留学 (国際文化教育センター) 角川書店  
 個性派アメリカ留学 (栄 陽子等) 三修社

最新版 海外留学事典 国際教育文化交流協会等  
 民家に学ぶ (伊藤ていじ) 文化出版局

日本伝奇伝説大事典 (乾 克己等) 角川書店  
 S D I 入門講座 航空ジャーナル社

孫子 (浅野裕一編) 講談社

## > 4 自然科学 <

ターニング・ポイント

(フリッツォフ・カブラ) 工作舎  
 パラダイム・ブック

(C+Fコミュニケーションズ編) 日本実業出版社  
 科学の世界 (渡辺正雄編) 共立出版

自然科学物語 (竹重 達人) //

日本の自然 2-8 岩波書店

科学者のための英文手紙文例辞典  
 (新見嘉兵衛等編) 朝倉書店

パソコンがつくる楽しい数学  
 (木村 良夫) 現代数学社

高校課程 代数・幾何 (茂木 勇) 裳華房

高校課程 数学 I ( // ) //

何のための数学か (モーリス・クライン) 紀伊國屋書店  
 対談数学大明神 (安野光雄等) 新潮社

マイコンが描く数学の世界  
 (森本 光生) 現代数学社

現代数学の系譜 共立出版  
 12: ラプラス確率論 (P. S. ラプラス)

代数系入門 (松坂 和夫) 岩波書店  
 組合せ論入門 (ジョージ・ポリア等) 近代科学社

線形代数 (F. Brickell) 共立出版  
 やさしい行列とベクトル (川久保勝夫) 日本実業出版社

線形代数入門 (松坂 和夫) 岩波書店  
 入門 行列および行列式 訂正版

(塩崎敬蔵等) 弘学出版  
 新課程 線形代数 (鶴丸孝司等) 内田老鶴圃

高校課程 基礎解析 (茂木 勇) 裳華房  
 応用解析学 (道脇義正等) コロナ社

一変数の微積分 (K.E. Hirst) 共立出版  
 多変数関数の微積分とベクトル解析

(加藤 祐輔) 講談社  
 多変数の微積分 (L. Marder) 共立出版

微積分読本 (田村 二郎) 岩波書店  
 複素数 (J. Williams) 共立出版

楽しい数学イラストの世界 第2版  
 (小沢健一等) サイエнтиスト社

ラプラス変換 (J. Williams) 共立出版  
 フーリエ級数と境界値問題

(W.E. Williams) //

代数計算による微分方程式 (金田数正等) 東海大学出版会  
 高校課程 微分・積分 (茂木 勇) 裳華房

常微分方程式 (J. Heading) 共立出版  
 変分法 (J.W. Craggs) //

パソコンによる作図の基礎 (福永節夫等) 培風館  
 図学 (峯村 吉泰) 名古屋大学出版会

最新 図学 改訂 (小畑 秀之) 成山堂書店  
 ベクトル (L. Marder) 共立出版

グラフ理論入門 (R. J. ウィルソン) 近代科学社  
 理工学基礎確率課程 (中川正雄等) 培風館

統計 (A.K. Shahani等) 共立出版  
 非線形システムの最適化 (坂和 正敏) 森北出版

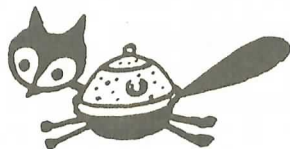
数値計算法 (小沢 一文) 共立出版  
 入門数値計算 (戸田英雄等) オーム社

電気と光 (ポール・G・ヒューエット) 共立出版  
 現代物理への招待 (広瀬 立成) 培風館

物理学とは何か (田中 一等) //  
 基礎の物理学 (眞田 順平) //

物理を見なおす本  
 (ジェームズ・S・トレフィル) 共立出版

タオ自然学 (フリッツォフ・カブラ) 工作舎  
 統単位のおはなし (小泉袈裟勝) 日本規格協会





S I の解説と演習	空気調和・衛生工学会	新版 化学を楽しくする5分間	(日本化学会編) 化学同人
世界共通の単位S I とは	日本規格協会	エンジニアのための化学熱力学入門	(小島 和夫) 培風館
物理学One Point	共立出版	化学系実験の基礎と心得	(頼実正弘編) "
27: ブラウン運動	(米沢富美子)	化学実験ハンドブック 第4版	(化学実験ハンドブック編集委員会編) 技報堂出版
ホーキングの宇宙	(J. ポズロー) 地人書館	図解とフローチャートによる新物理化学実験	(浅田誠一等) "
相対性理論は不思議でない	(杉本大一郎) 岩波書店	図解とフローチャートによる定性分析	( " ) "
大学演習 量子力学	(小谷正雄等編) 裳華房	図解とフローチャートによる定量分析	( " ) "
量子力学 1-2	(高田健次郎) 朝倉書店	無機化学命名法	(国際純正応用化学連合編) 南江堂
ベクトル場	(L.Marder) 共立出版	図解とフローチャートによる新無機化学実験	(浅田誠一等) 技報堂出版
解析力学	(園田 久) 朝倉書店	図解とフローチャートによる新有機化学実験	( " ) "
連続体力学	(澤田 龍吉) "	地球生命圏	(ジム・E・ラヴロック) 工作舎
パソコンによる流れ解析	(林 健次等) "	水を考える	九州大学出版会
振動・波動	(A. P. フレンチ) 培風館	地震予知 どこまで可能か	(浜田 和郎) 森北出版
光学	(松村 温) 朝倉書店	地震前兆現象	(力武 常次) 東京大学出版会
色の性質と技術	(応用物理学会光学懇話会編) "	高校課程 生物	(太田次郎等) 裳華房
熱統計物理学 1-2	(小林 謙二) "	アースワークス	(ライアル・ワトソン) 旺文社
エントロピーのめがね	(戸田 盛和) 岩波書店	図解ライフサイエンス入門	(新技術開発事業団生命科学グループ編)
ベクトル場と電磁場	(有馬 哲等) 東京図書	いのち	(柳澤桂子等) ほるぷ出版
電磁気学基礎論	(熊谷 信昭) オーム社	時間と進化	(村上陽一郎編) 東京大学出版会
電磁気学	(D.F.Lawden) 共立出版	海辺の生物	(西村三郎等著) 保育社
電磁気学 1-2	(宮副 泰) 朝倉書店	骨は語る	徳川将軍・大名家の人びと
電磁気学	(中山 正敏) 裳華房	脳と行動	(鈴木 尚) 東京大学出版会
考え方解き方電気磁気 第2版	(大石豊二郎) オーム社	死のリハーサル	(徳永 進) ゆるみ出版
電子見えない主役	(鈴木 皇) 岩波書店	騎手福永洋一の生還	(三輪 和雄) 文藝春秋
プラズマ基礎工学	(堤井 信力) 内田老鶴圃	身体と心のしくみ	(本間三郎等編) 朝倉書店
物性物理学 基礎と応用	(都築 卓司) 森北出版	男と女の脳をさぐる	(新井 泰允) 東京図書
物性論序論 1-2	(山藤 馨) 朝倉書店	世紀末の病	(大島 清) 光文社
一般科学180講 増補改訂版	(片山将道編) 日刊工業新聞社	アレルギー性疾患の克服	(甲田 光雄) 創元社
化学の教養	(松島祥夫編) 朝倉書店	消化器病のすべて	九州大学出版会
化学	(野口 駿等) 建帛社	腰痛クリニック	(蓮江光男等) 新興医学出版社
身の回りを化学の目で見れば	(加藤 俊二) 化学同人	スポーツ傷害・救急ハンドブック	(栗山 節郎) 不味堂出版
物質の理解	( " ) "	図解スポーツ・マッサージ	(鈴木克也等) "
化学	(川口 浩等) 医歯薬出版	エスカ食品・栄養・健康用語辞典	(栄養学・食品学・健康教育研究会編) 同文書院
現代化学入門 (ユージン・メーヤー)	九州大学出版会	まちがいだらけの薬の常識	(戸田 浄) 講談社
教養としての化学	(長島 弘三) 裳華房		
自然化学	(中島豊比古等) 開成出版		
化学への招待	(上野 景平) 化学同人		
フィールドの化学	(山県 登等) 産業図書		
一般化学	(吉富 未彦) 研成社		
学術用語集 化学編 増訂2版	(文部省、日本化学会編) 日本化学会		
化学のことば	(泉 邦彦) 講談社		
化学便覧 応用化学編	(日本化学会編) 丸善		
1: プロセス編			
2: 材料編			

## &gt; 5 工 学 &lt;

工学のための数理解析1-3

(富田幸雄等) 実教出版

計測の自動化とロボット

(計量管理協会、計測サーボ技術調査委員会編) コロナ社  
機械技術者のためのセンサ技術入門

(佐野清人) 日刊工業新聞社

センサ先端技術

(柳田博明等) 海文堂

プログラム学習による構造力学・材料力学入門

(P.C.L.クロックストーン等) 森北出版

固体力学におけるコンピュータアナリシス

(日本機械学会編) コロナ社

力学

(D.F.Lawden) 共立出版

パソコンを活用した材料力学

(岩佐哲夫等) 日刊工業新聞社

応力ひずみ解析

(菅野昭等) 朝倉書店

材料力学を考える

(津村利光) 実教出版

塑性変形の加工の力学 (H.リップマン) 森北出版

やさしいレオロジー (村上謙吉) 産業図書

だれにでもわかるマトリックス構造力学の基礎

(平野喜三郎等) 啓学出版

構造力学演習

(平野喜三郎) 理工図書

図解 不静定構造力学入門 ( ) 現代理工学出版

構造力学演習 下巻

(岩瀬敏昭) 現代工学社

構造解析学 3 (小林定夫) 丸善

有限要素システム入門 (菊地文雄等) 日科技連出版社

MS-FORTRANによる有限/境界要素解析プログラミング  
(三好俊郎) サイエンス社

確率有限要素法入門 (中桐滋等) 培風館

新素材用語事典 (青柳全) 日刊工業新聞社

ファインセラミックス事典 技報堂出版

ファインセラミックス

(エレセラ出版委員会編) 技 献

ファインセラミックス新素材

(無機材質研究所、科学技術広報財団編) 日刊工業新聞社  
光と材料 (住友電気工業株式会社編) 共立出版  
金属系新素材(科学技術庁金属材料技術研究所編) 日刊工業新聞社  
材料システム工学 (須藤一) 内田老鶴圃

セラミックを考える (素木洋一) 東洋経済新報社

新金属材料 (中小企業研究所編) 日刊工業新聞社

エネルギー管理技術 熱管理編 省エネルギーセンター

現代社会とエネルギー (茅陽一編) 東京大学出版会

例題で学ぶエネルギー管理のための計算法 (中井資)

省エネルギーセンター

エネルギー管理のための熱工学と省エネルギー対策

新エネルギー技術 (山崎泰雄) 日本工業出版

CAD/CAM入門 (吉田宏等) 森北出版

" (朝比奈奎一) 海文堂出版

" (C.B.ベサント) 啓学出版

CAD/CAMキーワード100

(CAD/CAM用語研究会編) 工業調査会

図学入門 (磯田浩等) 東京大学出版会

基準面による第三角法図学 (近藤誠造) 養賢堂

パソコンCAD (光成豊明) 産業図書

科学技術史の裏通り (城阪俊吉) 日刊工業新聞社

広島先端技術 Part1-2 三田出版会

最新科学技術用語辞典 英独和, 和英, 独英

(藤原鎮男等編) 三修社

これからの科学と技術 九州大学出版会

街角の発明家 (田辺四郎) 理工図書

復元と構想 (大林組編) 東京書籍

土木工学概論 (高橋裕等) 森北出版

建設白書 昭和162年版 (建設省編) 大蔵省印刷局

新体系土木工学 15 (土木学会編) 技報堂出版

" 38 ( " ) "

国家・地方公務員土木職 問題解答600題 第2版

オーム社

絵とカラー写真で理解する岩盤力学入門

(三木幸蔵) 鹿島出版会

大学課程 鉄筋コンクリート工学 第4版

(赤尾親助等) オーム社

新しいコンクリート工学 (河野清等) 朝倉書店

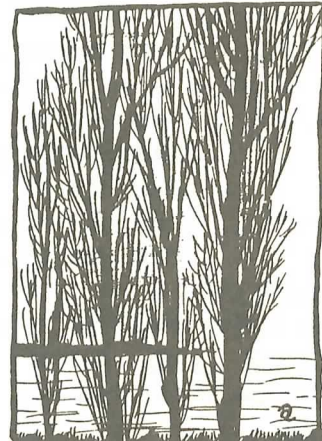
ネピルのコンクリートの特性

(A.M.Neville) 技報堂出版

コンクリートの耐久性 (岡田清編) 朝倉書店

鉄筋コンクリート工学 (岡村甫等) 市ヶ谷出版社

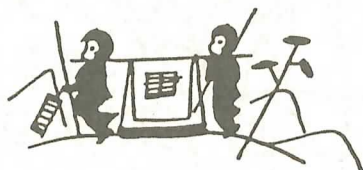
地質工学用語事典 (S.H.Somerville等) オーム社



- コンクリートものがたり (山田 順治) 文一総合出版  
 コンクリート骨材ハンドブック (L. ドラー・マントアニ) 技術書院  
 すぐに役立つ測量現場必携1-7 (日本測量調査技術協会編) 鹿島出版会  
 地表で測る (須田 教明) 森北出版  
 土木施工法 (米倉 亮三) コロナ社  
 補強土構造物の理論と実際 (コーリン, J.F.P.ジョーンズ) 鹿島出版会  
 青函トンネル物語 吉井書店  
 NATM-I (谷本 親伯) 森北出版  
 橋のはなし 1-2 (吉田 徹編) 技報堂出版  
 橋 Bridges in Japan 1985-1986 土木学会  
 コンクリート橋の設計 (石橋忠良等) 技報堂出版  
 パソコンによる水理学演習 (河村三郎等) 森北出版  
 水辺のデザイン (中岡 義介) //  
 ショッピングモールの設計計画 (高橋志保彦) 彰国社  
 環境工学 (石井 一郎) 森北出版  
 環境白書 昭和62年版 (環境庁編) 大蔵省印刷局  
 からだが危ない (高橋 暁正) 三省堂  
 建築空間論 (上松 佑二) 早稲田大学出版部  
 ラグナル・エストベリ (エアラス・コーネル) 相模書房  
 建築アラカルト (宇野 英隆) 鹿島出版会  
 建築系のためのBASICプログラミング (谷川恭雄等) 森北出版  
 都市の道具 (柴久庵祥二) 鹿島出版会  
 吉阪隆正集 第5巻 勁草書房  
 図解建築法規事典 62年版 (日野 三郎) 理工学社  
 1級建築士試験問題選集 62年版 相模書房  
 2級建築士試験問題選集 62年版 //  
 一級建築士(受験)学科総合対策 昭和62年増補改訂版 (日本建築技術者指導センター編) 霞ヶ関出版社  
 二級建築士(受験)学科総合対策 昭和62年増補改訂版 ( // ) //  
 絵とき日本人の住まい (光藤 俊夫) 丸善  
 松本城 (金井 圓編) 名著出版  
 江戸城 (小松 和博) //  
 アジアの都市と建築 (加藤 祐三編) 鹿島出版会  
 検証 日本人の「住まい」はどこから来たか (吉田 桂二) 鳳山社  
 建築の現代思想 (杉本 俊多) 鹿島出版会  
 近代建築の空間再読 (富永 譲編) 彰国社  
 S建築構造設計 (構造家懇談会編) オーム社  
 鉄骨造建築物の耐久性向上技術 (国土開発技術研究センター編) 技報堂出版  
 中性化 (和泉意登志等) //  
 鉄筋コンクリート造建築物の耐久性向上技術 (国土開発技術研究センター編) 技報堂出版  
 DA建築図集 複合市民施設 2 (日本建築家協会編) 彰国社  
 図解建築透視図・陰影図の作図法 (乾 亮三等) オーム社  
 コンパクト建築設計資料集成 (日本建築学会編) 丸善  
 設計製図 (松田 紘等) オーム社  
 マイコンによる建築計画の作り方 (渡辺 仁史) 鹿島出版会  
 建築工事現場監理要項 (松田平田坂本設計事務所編) 理工図書  
 建築図集 現代の日本の病院 (日本病院建築協会編) 鹿島出版会  
 GA Houses 世界の住宅 21 (ウェイン藤井編) A.D.A.Edita Tokyo  
 笑う住宅 (石山 修武) 筑摩書房  
 一流メーカーの住宅カタログ 講談社  
 住まいづくり・男の注文100章 (榎沢 成明) 鹿島出版会  
 庭をたのしむ (寺岡 雅明) 彰国社  
 木造建築 (里川 長生) 理工図書  
 住まいの地下室 (東方 洋雄) オーム社  
 台所のはなし (高橋昭子等) 鹿島出版会  
 風呂のはなし (大場 修) //  
 便所のはなし (谷 直樹等) //  
 空気調和の設計 (横山 浩一) 共立出版  
 インテリアプランナー問題集 (インテリアプランナー研究会) 山海堂  
 インテリアコーディネーター資格試験 '87全訂版 (資格試験問題研究会編) 日刊工業新聞社  
 インテリアプランナー (インテリアプランナー研究会編) 山海堂  
 図解 インテリア図面の見方・かき方 (尾上 孝一) オーム社  
 機械工学標準問題と解説 (服部 敏夫) 技報堂出版  
 重要公式活用ブック 機械工学編 (須藤巨啓等編) 東京電機大学出版局  
 ポケットブック機械計算公式集 (機械計算公式研究会編) 日本理工出版会  
 詳解機械工学演習 (酒井俊道編) 共立出版  
 機械と人間 (竹内 啓編) 東京大学出版会  
 朝倉機械工学講座 7-8 (北郷薫等編) 朝倉書店  
 機械工学大系 36 コロナ社  
 歯車 3-4 (仙波 正荘) 日刊工業新聞社  
 図解NC工作機械の入門 (山岸 正謙) 東京大学出版局  
 ベルヌーイの定理と現代テクノロジー (細川 巖) 共立出版  
 精密工学講座 15 コロナ社

国鉄車両一覧 (日本交通公社編) 日本交通公社  
 自転車 最新カタログ 86 成美堂出版  
 自動車工学 (樋口 健治) 朝倉書店  
 自動車工学  
 (大阪産業大学自動車工学編集委員会編) 日刊工業新聞社  
 ニューカー 100  
 (朝日新車情報 国産車ベストチョイス'86) 朝日新聞社  
 バイクグッズ ブランド・セレクション 講談社  
 スペース・パノラマ (バーバラ・ヒチコック等)  
 パンリサーチ・インスティテュート  
 原子炉技術の発展 上, 下 (W. マーシャル編)  
 筑摩書房  
 電気工学精選問題集 (電気教育研究会編)  
 学芸出版社  
 メカトロニクスの電気学入門  
 (石田 幸男) オーム社  
 解説 電気設備の技術基準 第5版  
 (資源エネルギー庁公益事業部編) 文一総合出版  
 基礎電気理論 (小林 健一) コロナ社  
 電気基礎トレーニング上, 下(尾見定之等) 〃  
 初めて学ぶ電気基礎 (和田茂博等) オーム社  
 電気電子用語事典 (茂木 晃編) 〃  
 わかる電気回路 (天野 弘等) 日新出版  
 電気回路のための数学と例解(齊藤嘉博等)  
 東京電機大学出版局  
 考え方 解き方 交流回路 I  
 (大石豊二郎) オーム社  
 CVケーブル (速水 敏幸) コロナ社  
 電気機械工学演習 (広瀬敏一等) 学献社  
 電気機械学例題演習 (猪狩 武尚) コロナ社  
 小型モータの基礎とマイコン制御  
 (見城 尚志) 総合電子出版社  
 ACサーボモータとマイコン制御  
 (見城尚志等) 〃  
 小型ACモータの設計と制御  
 (三宅 博) 〃  
 電力工学 (村山康宏等) 森北出版

現代暗号理論 (池野信一等) 電子通信学会  
 高度情報通信システム (葉原耕平等) オーム社  
 CDプレーヤー入門 (林 謙二編) コロナ社  
 パソコン通信 (秋山東一等) オーム社  
 通信用マイクロ波回路 (宮内一洋等) 電子通信学会  
 マイクロ波・ミリ波工学 (内藤 喜之) コロナ社  
 ニューメディア衛星放送の受信入門 日本放送出版協会  
 ビットのはなし (伊藤 健一) 日刊工業新聞社  
 デジタルのはなし (相良 岩男) 〃  
 オペレーティング システム論  
 (池田 克夫) コロナ社  
 メカトロニクスの基礎 (有本 卓等) 昭晃堂  
 有限オートマトン入門 (岩田茂樹等) 森北出版  
 手作りロボット入門 (片方善治等) 啓学出版  
 プログラム学習によるデジタル制御  
 (松下電器 製造・技術研修所編) 松下電器産業  
 プログラム学習によるマイコン制御 基礎編  
 ( 〃 〃 ) 〃  
 デジタル制御入門 (高木 章二) オーム社  
 図解とシミュレーションによる自動制御工学演習  
 (太平洋工業(株)編) 日刊工業新聞社  
 わかる電子回路 (石橋泰雄等) 日新出版  
 速解 論理回路 (宮田 武雄) コロナ社  
 論理回路例題演習 (高橋 寛) 〃  
 非線形回路の数値解析法 (牛田明夫等) 森北出版  
 図解 音声デバイス活用の実際  
 (中田和雄等編) オーム社  
 音声認識のはなし (小畑 秀文) 日刊工業新聞社  
 レーザのはなし (小林 春洋) 〃  
 金属工業実験 (五弓勇雄編) 丸善  
 金属の強度と破壊 (黒木剛史郎等) 森北出版  
 錆と防食のはなし (松島 巖) 日刊工業新聞社  
 美術鋳物の手法 (鹿取 一男) アグネ  
 金属材料の溶接 (蒲地 一嘉) 共立出版  
 粘土の不思議(粘土の不思議編集委員会編) 土質工学会  
 火のはなし (秋田 一雄) 技報堂出版  
 バイオ化粧品 (岡本暉彦) 共立出版  
 タイヤ百科 (ブリヂストン編集) 東洋経済新報社  
 エンプラはどう使われているか (牧廣等) 産業図書  
 接着のはなし (井本 立也) 日刊工業新聞社  
 紙のはなし 1-2 技報堂出版  
 食の科学 九州大学出版会  
 庖丁人生ごっくばらん (田中 喜一) 平凡社  
 田川律 [台所] 術 なにが男の料理だ  
 (田川 律) 晶文社  
 身近なくらしの科学 (宮川雄一郎) 東京図書  
 カレーライスおもしろ雑学事典  
 (ハウス食品工業株式会社編) 講談社



野外料理の本 (スーパー・ドーム・スタジアム編)  
CBS・ソニー出版  
コーヒー雑学事典 講談社  
Girls Book (宮地優子等) JICC 出版局

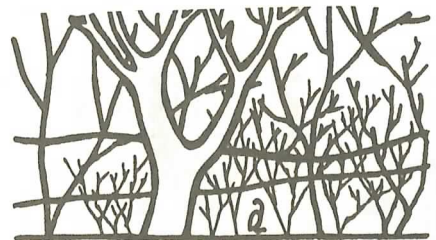
> 6 産 業 <

国土利用白書 昭和62年版 (国土庁編) 大蔵省印刷局  
水と土と緑のはなし (江崎春雄等編) 技報堂出版  
百億人を養えるか (ジョゼフ・クラッツマン)  
農山漁村文化協会  
図録・農民生活史事典 (秋山高志等編) 柏書房  
新しい林業・林産業 九州大学出版会  
図録・山漁村生活史事典 (秋山高志等編) 柏書房  
東京いい店・うまい店 文藝春秋  
楽しくできるPOP広告のイラスト実技  
(秋葉 雄幸) 誠文堂新光社  
わが子を暴走族にしない本 (塚塚 輝男)  
パンリサーチ・インスティテュート  
バスの文化史 (中川 浩一) 筑摩書房

> 7 芸 術 <

美術・造形の基礎  
(大学美術・造形教育研究会編) 産業図書  
世紀末の美と夢 1 (辻 邦生編) 集英社  
ヨーロッパの美術館モニュメント 主婦の友社  
岩波美術館 歴史館第1-2室  
(柳 宗玄) 岩波書店  
NHK国宝への旅 1-4 (NHK取材班)  
日本放送出版協会  
佛像の美しさに憑かれて (町田 甲一) 保育社  
1925年様式/アール・デコの世界  
(イヴォンヌ・ブリュナヌエル) 岩崎美術社  
人物を描く (佐藤 真一) 美術出版社  
花の写生と制作技法  
(ウルスラ・カイザー) 美術出版社  
動物写生と制作技法  
(トニー・マイルハーマー) 〃  
絵のある本の歴史 (荒俣 宏) 平凡社  
ミニカードテクニック (宮崎 健) 美術出版社  
すぐに使えるカット事典 1-6  
(現代デザイン研究所編) ポプラ社  
基本レタリング (真覚 静子) 鳳山社  
カメラの山旅 (川口 邦雄) 実業之日本社  
日本やきもの旅 (小林庸浩等) 講談社  
日本のやきもの 1-10 淡交社

パターンデザイン事典 (杉山 明博) 鳳山社  
西洋音楽史  
(ドナルド・H・ヴァン・エス) 新時代社  
世界の音楽家 (古田 帯川) 主婦の友社  
楽しいやさしいマイコン・ミュージック入門  
(沢 彰記等) 日本実業出版社  
上を向いて歩こう (柏木由起子) フジテレビ出版  
世界映画史 1 (G. サドゥール) みすず書房  
映画はもうすぐ百歳になる (四方田犬彦) 筑摩書房  
アマチュアリズムとスポーツ  
(ユージン A. グレーダー) 不味堂出版  
スポーツの美学 (樋口 聡) 〃  
健康体力論 改訂版 (阿久津邦男) 文化書房博文社  
体力トレーニング (宮村実晴等編) 真興交易  
最新スポーツ大事典 大修館書店  
闘争の倫理 (大西鉄之祐等) 二玄社  
完全図解体育ゲーム大事典 (茨城惇輔等) 東陽出版  
図解・ゲームの指導事典 (高橋和敏等) 不味堂出版  
ハンググライダー 鳥になる本 (平田 実等)  
成美堂出版  
中・上級者のスキー上達テキスト  
(雫石インターアルペン編) スキージャーナル  
日本スキー教程 (全日本スキー連盟編) 〃  
植村直己の世界 文藝春秋  
江戸時代からの釣り (永田 一脩) 新日本出版社  
パリ・ダカール日記 (山本 昌美)  
CBS・ソニー出版  
太極拳 新装版 (楊 名時) 文化出版局  
ボード・ゲーム (松田 道弘) 筑摩書房  
生花のデザイン (大西 怜子) 雄鶏社  
なぜ花をいけるか (下田 尚利) 講談社  
竹沢紀久子の花の本 (竹沢紀久子等) 求龍堂  
チェスの楽しみ (松田 道弘) 筑摩書房  
面白いトランプ・ゲーム (〃) 〃  
トランプ・マジック (〃) 〃  
ひとりで遊ぶ本 (〃) 〃  
ふたりで遊ぶ本 (〃) 〃  
宴会・コンパ裏ワザパフォーマンス  
(中村 仁等) 永岡書店



## &gt; 8 語 学 &lt;

- ことばの科学 九州大学出版会  
 会議の心理学 (石川 弘義) 筑 摩 書 房  
 日本語の面白さ (劉 徳有) サイマル出版会  
 日本語の常識・非常識 (井口 樹生) 講 談 社  
 辞書なしで学べる中国語の最初歩 (野島 進等) 三 修 社  
 英語おもしろThat's学 (速川 和男) 永 岡 書 店  
 日本人の英語感覚 (荒木 博之) P H P 研究所  
 This is a penの英語術 (長谷川 潔) ご ま 書 房  
 ケントとヒロシの英会話生中継 (生島ヒロシ等) 講 談 社  
 独和広辞典 (R. シンチンゲル等編) 三 修 社  
 ドイツ語の手紙 (宮内敬太郎) 白 水 社  
 ドイツ語で手紙を書こう (大塚 綾等) 三 修 社

## &gt; 9 文 学 &lt;

- トリックものがたり (松田 道弘) 筑 摩 書 房  
 文学のなかの人間像 九州大学出版会  
 現代の文学 //
- 日本古典文学大辞典 岩 波 書 店  
 マンガ百人一首 (吉原幸子等) 平 凡 社  
 君なら蝶に (折笠 美秋) 立 風 書 房  
 井上成美 (阿川 弘之) 新 潮 社  
 堀の中のプレイ・ボール (安部 譲二) 講 談 社  
 たけしの新坊ちゃん (ビート・たけし) 太 田 出 版  
 哀しみの女 (五木 寛之) 新 潮 社  
 草のうた (三浦 綾子) 角 川 書 店  
 東京デート漂流 (永倉 万治) 講 談 社  
 アローン・アゲイン (落合 恵子) //
- 志賀直哉小説選 1-4 岩 波 書 店  
 広島に原爆を落とす日 (つかこうへい) 角 川 書 店  
 僕はヤングマン (芦田 淳) 文 化 出 版 局  
 もう大人だ、と思っている人へ20章 (草柳 大蔵) 大 和 書 房  
 わが青春 我が放浪 (森 敦) 福 武 書 店  
 ひたむきに生きる (澤地 久枝) 講 談 社  
 いのち華やぐ (瀬戸内寂聴) //
- 自分をつくる (臼井 吉見) 筑 摩 書 房  
 人の生きるは何のため (宇野 信夫) 講 談 社  
 挑戦者たち (落合 信彦) 集 英 社  
 シベリア抑留 (御田 重宝) 講 談 社  
 無名人名語録 (永 六輔) //

## 完訳 日本の古典

- 20: 源氏物語 7  
 27: 提中納言物語 無名草子  
 29: 大鏡 2  
 32: 今昔物語集 3  
 45: 平家物語 4

小 学 館

## 昭和文学全集

- 1, 10, 15-16, 18, 20-21

小 学 館

## 岩 波 新 書

岩 波 書 店

- 358: 音楽の現代史 (諸井 誠)  
 359: 戒厳令下チリ潜入記 (G. ガルシア=マルケス)  
 360: サケ (佐藤 重勝)  
 361: ニーチェ (三島 憲一)  
 362: 先端技術のゆくえ (坂本 賢三)  
 363: 日本教育小史 近・現代 (山住 正己)  
 364: エスキモー (宮岡 伯人)  
 365: 敬語 (南 不二男)  
 366: 新つけもの考 (前田 安彦)  
 367: 聖母マリア (植田 重雄)  
 368: 天気情報の見方 (立平 良三)  
 369: 女たちのアジア (松井やより)  
 370: 折々のうた第6 (大岡 信)  
 371: 平和憲法 (杉原 泰雄)  
 372: 象徴天皇 (高橋 紘)  
 373: 日本語の構造 (中島 文雄)  
 374: 集落への旅 (原 広司)  
 375: 馬は語る (沢崎 担)  
 376: 日米経済摩擦 (船橋 洋一)  
 377: クマに会ったらどうするか (玉手 英夫)  
 378: ルソン戦 (阿利 莫二)  
 379: 酒と健康 (高須 俊明)  
 380: イスラム急進派 (岡倉 徹志)  
 381: マリリン・モンロー (亀井 俊介)

## 岩波ジュニア新書

岩 波 書 店

- 119: ゼルマの詩集 (ゼルマ・M=アイジンガー)  
 120: ハンドブック国際連合 (武者小路公秀)  
 121: 現代社会100面相 (鎌田 慧)  
 122: 生命とはなんだろう (中村 運)  
 123: 数学をパソコンでRUNしよう (飯高 茂)  
 124: わらび座修学旅行 (及川 和男)  
 125: データブック世界各国地理 (竹内 啓一)  
 126: 生きるということ (宮田 光雄)  
 127: 英語をクリアしよう (西田 実)  
 128: クルマ・20世紀のトップランナー (星野 芳郎)  
 129: みんな地球に生きるひと (アグネス・チャン)  
 130: 地球は青かった (平田 寛)

カラーブックス

保 育 社

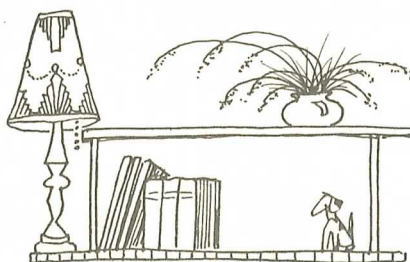
寄 贈 図 書

- 719: 横浜味どころ (白神 義夫)
- 720: イベント列車 (関 崇博)
- 721: 札幌いい味101店 (木村久里等)
- 722: 路面電車 (大塚和之等)
- 723: 京の隠れ寺 (相馬 大等)
- 724: 続 名古屋味どころ (中島 公)
- 725: シティ電車 (慶應義塾大学鉄道研究会)
- 727: バードウォッチング (常山 秀夫)
- 728: 消防自動車 (いのうえ・こーいち等)
- 729: 花ことばファンタジー (中村 俊子)
- 730: 東京の電車 (井上広和等)
- 731: 京都 寺の味 (ひらのりょうこ)
- 732: ニューモデル '87年版(いのうえ・こーいち)
- 733: ダンボールおもちゃ (実野 恒久)
- 734: 地下鉄考現学 (吉川文夫等)
- 735: スポーツ医学2 (市川 宣恭)

書 名	寄 贈 者
原子力開発三十年史	日本原子力文化振興財団
ITALIA OGGI	イタリア貿易振興東京事務所
第3回ソフトウェアコンファレンス	プロシーディングス
	大阪科学技術センター
広島女子大学地域研究叢書 VIII	広島女子大学
呉市史 第5巻	呉市
大山北麓の民族	米子工業高等専門学校
ふれあいの空間	大同生命保険相互会社
名古屋工業大学八十年史	名古屋工業大学
静岡大学テレビジョン技術史	浜松電子工学奨励会

新 潮 文 庫

1985-1986年 新刊書



編 集 後 記

本号の学生諸君の12編のうち、低学年の6編は、国語の大林先生、橋本先生、社会の宇根先生のご協力で、夏休み中の課題の中から掲載しました。上級生の6編については、比較的図書をよく利用する学生にお願いして書いてもらったものです。

先生方の4編は、新任の篠部先生にエッセイ、焼き物を趣味にされ、ご自分でもロクロを回される橋本先生に「窯場めぐり」、宇根先生には「郷土シリーズ」として呉の歴史、在外研究員としてドイツに留学中の岩根先生に「ドイツ通信」の執筆をお願いしました。

特に「ドイツ通信」は典型的日本人である岩根先生の遠いヨーロッパでの奮闘振りが面白く書かれており、大変楽しい「海外だより」となりました。こういった記事は、図書とは直接関係ないものですが、学生諸君の興味を引きますので、魅力ある「図書だより」とするために、今後もどんどん掲載したいと考えています。

ご協力賜った皆様にお礼を申し上げます。

(藤井記)

